

平成30年度第8回教育委員会協議会 会議録

平成30年度第8回教育委員会協議会

場所：高知共済会館

(1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成30年9月5日(水) 18:00

閉会 平成30年9月5日(水) 21:00

(2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	伊藤 博明
	教育委員	平田 健一
	教育委員	八田 章光
	教育委員	木村 祐二
	教育委員	中橋 紅美
	教育委員	永野 隆史

(3) 高知県教育委員会会議規則第8条、第9条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長	岡村 昭一
〃	教育次長	高岸 憲二
〃	教育次長	長岡 幹泰
〃	高等学校課課長	竹崎 実
〃	高等学校課企画監(再編振興室長)	山岡 正文
〃	高等学校課課長補佐	藤田 優子
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	高等学校課指導主事	野中 昭良(会議録作成)
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	教育政策課課長補佐	泉 千恵
〃	教育政策課指導主事	小島 文晴(会議録作成)

【開会】

伊藤教育長	<p>ただ今から、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する平成30年度第8回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。最初に本日の教育委員会協議会について、ご説明いたします。</p> <p>本日は、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の最終とりまとめ(案)について、協議をしていただくことになっております。</p> <p>具体的には、5月に決定いただきました各校の学校の在り方の方向性に具体的な取組などを明記して、移転や統合する学校につきましては、その在り方も記載しているものになっております。</p> <p>なお、この最終とりまとめ(案)につきましては、この後、本日のご意見を踏まえて修正したものを9月の定例教育委員会で報告をさせていただきます。その後、県議会でも報告をし、ご意見をいただいたうえで、パブリックコメントとして県民の皆様にご意見をお伺いするという事になっておりますので、どうかよろしくお願いいたします。</p>
-------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

中橋委員	<p>それでは、本日の議事録署名人は中橋委員、よろしくお願いいたします。</p> <p>はい。</p>
伊藤教育長	<p>それでは早速、議事に入ってまいりたいと思います。</p> <p>まず、「後期実施計画」のパブリックコメント案の全体及び東部地域について、高等学校課から説明をお願いします。</p>

【議題】

県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の「最終とりまとめ（パブリックコメント案）」について

(1) 全体・東部地域

山岡企画監	<p>まず全体の所と東部地域、それから最後の資料編についても、簡単に説明させていただきます。</p> <p>まず1ページに、「ICTの活用による中山間地域の高校の教育の充実について」というところがございます。</p> <p>中山間地域の学校は、生徒数が少なく教員配置も限定される一方で、就職から進学まで多様な生徒に対応できる教育が求められています。国公立大学受験に必要な科目の選択が困難なことが多いといったような課題もあります。</p> <p>また、公共交通機関の整備が十分でない地域は、国公立大学などへの進学を目指し、自宅を離れ中心部の高校に進学することも多く、保護者の経済的な負担の増加や中山間地域の人口減少の一因となっているところがございます。</p> <p>そこで、ICTを活用することで、中山間地域の学校に通学しながら国公立大学に進学できるように、良好な教育環境を整えたいというふうに考えております。</p> <p>教育環境の充実を図ることで、若い子育て世代が住み慣れた地域を離れることを食い止めるなど、中山間地域の活性化にもつながり、また、安心して進学できる教育環境を整えることで、県外からの移住を促進することにもつながっていくものと考えています。</p> <p>オンデマンド教材は、室戸高校など、そこにも書いていますとおり12校が現在活用しております。全ての科目を自由な時間に視聴できるという特長がございます。</p> <p>一方、リアルタイムに送受信を行う遠隔教育は、高知追手前高校の本校と分校や、窪川高校と四万十高校、岡豊高校と嶺北高校などで行っております。生徒から先生に質問ができるなど双方向のやりとりが可能であり、現実の授業に近いという特長がございます。</p> <p>今後の方向性として、オンデマンド教材については、学校でオンデマンド教材を選定したり、導入する学年を検討したりするほか、教員や学習支援員による支援体制を充実することが求められます。</p> <p>遠隔教育につきましては、県教育センターを配信拠点として中山間地域の学校に展開できるよう、体制の整備を促進していく。また、専任の教員による進学指導講座などを実施していきたいと考えております。</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

全体の所の ICT の活用については、以上でございます。

続きまして、東部地域につきまして、4 ページの室戸高校をご覧ください。

室戸高校につきましては、地域理解と地域の課題発見解決学習という部分では、ジオパークというところで、「ジオパーク学」で成果発表会を開催。

あるいは、地域のイベントへの協力ということでは、室戸中学校とのバスケットボールやサッカーといった放課後部活動の交流。それから、海外への中学生との合同の短期留学などを考えているというところです。

そして、室戸高校は総合学科でございますので、総合学科のメリットを保護者や中学生に理解してもらうように努める。

二つ目のポツ（・）にありますけれども、生徒減少という状況がございますので、総合学科につきましては、平成 30 年度を起算年として、3 年連続して入学者が 40 人に満たない状況になった場合、単位制普通科への改編を検討するという事を考えております。

中山間地域にある学校に共通する項目としては、ICT を活用した学習教材の提供など。それから、特色ある学校づくりの面では、全国ベスト 4 を目標に女子硬式野球部を活性化させる。そういったことで、地域外の生徒を確保するというところでございます。

併せまして、寮の活用も含め、部活動支援を更に充実させていきたいと考えております。

続きまして、5 ページの中芸高校でございます。

様々な学習歴や多様なニーズのある生徒が来られるというところで、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）、若者サポートステーションなどの外部機関との連携もより図っていききたいというところです。

そして、不登校や発達障害のある生徒さんがおられるということもありますので、生徒理解と支援のための取組を実施する。

また、通級による指導を導入するという事もありますので、特別支援学校との連携を更に推進していききたいと考えております。

そして、小学部、中高等部のある特別支援学校の分校、山田養護学校の分校と同居しているメリットを生かす取組も図っていききたい。「中芸学」という中芸地区を学習のフィールドとした取組を実践していききたいと考えております。

夜間部につきましては、1 年次生では、学び直しとして 0 時間目を設定する。あるいは聴講生もかなり多くおられますので、聴講生と在校生の交流活動を実施していききたいと考えております。

続きまして、6 ページの安芸高校・安芸中学校をお願いいたします。

東部地域の進学拠点校ですので、取組としましては、1 年次からの習熟度別学習、2 年次からのコース制の導入。

そして、併設型中高一貫教育校のメリットを生かしてキャリア教育に力を入れ、職場体験やキャリア講演も実施していくという事を考えています。

併せまして、部活動の面では、東部地域の運動部活動強化拠点校ですので、重点部活動を設定した活動に充実を図っていききたい。そこに書いている、例えば、陸上競技とか体操競技、そして文化部では、吹奏楽、書道部、

競技かるたなどが挙げられます。

続きまして、安芸桜ヶ丘高校につきましては、工業科では、ものづくり協議会やデザインコンペへの参加。そして、資格取得を促すという取組をする。

商業科では「商い甲子園」や「桜市」などへの参加。各種コンテストへの参加も考えていきたい。

そして、丸（○）の一番下ですけれども、安芸高等学校との統合を見据えた学科改編を平成34年度に行いたいと考えております。

工業科は1科2専攻、まだこれは名前としては案ですけども、「機械・土木科」（機械専攻、土木専攻）。そして商業科は1科で、「商業探究科」ということを考えております。

続きまして、6ページの学校の在り方の所からいくと枠外になりますけれども、安芸中学校・高等学校と安芸桜ヶ丘高等学校との統合について、ご説明させていただきたいと思っております。

両校の統合につきましては、両校を統合し、適正規模を維持した学校を設け、東部地域の活力ある拠点校とする。安芸桜ヶ丘高等学校の敷地に統合後の学校を設置するという考えであります。

施設整備がありますので、統合完了年度は平成35年度。統合に向けた学科改編は新学習指導要領にあわせまして、平成34年度と考えております。

統合に向けた考え方としましては、きめ細かな指導ができる適正規模は1学年4学級以上であるところ、現在安芸高校は3学級規模、安芸桜ヶ丘高校は1学級規模です。

また、安芸中学校・高等学校は、南海トラフ地震による津波被害で長期浸水が予想されている地域でもあり、校舎も海岸に面しており、他の県立学校よりもリスクが高いといったこともありますので、津波被害から確実に生徒を守るための移転が望ましいものと考えております。

こうしたことから、南海トラフ地震に強く、適正規模を維持した東部地域の活力ある拠点校を設けるため、両校を統合し、統合後の中高一貫教育校を安芸桜ヶ丘高等学校の校地に設置したいと考えております。

目指す姿としては、進学指導の実績がある安芸高等学校と、就職に強い安芸桜ヶ丘高等学校の強みを生かして、東部地域の進学拠点校として更なる発展を目指し、大学進学に対応できる学力の保証をするとともに、勤労観・職業観の養成を行い、生徒の多様な進路希望に対応していきたいと考えております。

そのため、習熟度に応じたカリキュラム編成、国公立や難関私立大学にも対応できる教育課程の実施、工業科や商業科では専門的な知識・技術の習得を行い、職業教育の充実や就職支援の強化を行う。

併せまして、地域と連携した防災教育の推進や、東部地域の地域おこし活動に参加することで、社会性の育成を図り、地域や支える人材の育成を目指したい。さらに、部活動の充実のほか、生徒会活動、体育祭・文化祭などの特別活動の活性化により生徒が切磋琢磨できる環境づくりを推進する。

こうした取組を推進することで、地域の方々から信頼され、地域内の中学生が行きたい学校になり、地域の中学校からの進学率を向上させていきたいと考えております。

なお、併設中学校につきましては、併設高等学校の三つの学科、普通科、機械・土木科、商業探究科に進学することができるようにするため、中学校段階からキャリア教育を充実していく。

統合の方法としましては、統合後の中学校は2学級規模を予定しておりますが、最終的には、平成34年度の志願者数を踏まえ、募集定員を平成34年6月までに決定したいと考えております。

統合後の高等学校は、全日制の課程で普通科3学級、工業科1学級、商業科1学級の1学年5学級規模とする。

統合に当たりましては、安芸高等学校及び安芸桜ヶ丘高等学校とも、平成34年度入学生から学科改編を行い、新しい教育課程による教育を行う。

統合は平成35年4月1日に行うこととし、平成35年度の新入学生は、統合後の学校で募集する。

統合後の学校の校名は、安芸中学校・高等学校とする。

校名以外の校章・校歌・制服・スクールカラーなどは、両校の関係者の意見を聴きながら県教育委員会で検討し、決定する。制服につきましては、平成35年度に高校に進学する中学生が、平成32年度に中学校に入学することから、その前に決めておく必要がありますので、平成31年10月末までに決める。そして、それ以外の校章等につきましては、平成33年度末までに決めたいと考えています。

教育環境の充実としましては、統合までに、部活動などを通して両校の交流を図っていく。

ハード面の整備につきましては、安芸桜ヶ丘高等学校の通常教室となる校舎と体育館を津波対策を踏まえたものに改築する。さらに必要な実習棟などの改修や設備の更新なども行い、中高一貫教育校として充実した教育環境の整備を行いたいと考えております。

続きまして、最後の方に資料編というのがありますけれども、42ページをご覧ください。

資料編ですが、42・43ページは、教育委員会協議会をこれまでに計18回開催してきましたが、その審議過程を掲載しています。

44・45ページは、県立高等学校と県立中学校の学科の改編等の実施状況です。

それから、46ページは、地域別中学校卒業生数の推移です。

47ページは、平成31年度における地域ごとにどんな学科や学校があって、学級数はどれくらいかという一覧表（募集学級数別学校一覧）がございます。

48ページは、学科やコースなどをより細かく一覧表にしたものでございます。

49ページは、適正な学校規模の維持と適切な学校配置について、地図に落としこんでいるものでございます。

そして50ページは、安芸中学校・高等学校と安芸桜ヶ丘高等学校の統合後の姿をイメージ化したものです。上にも書いていますけれども、東部地域の活力ある拠点校としての中高一貫教育校であり、適正規模を維持した魅力ある教育活動の充実と、将来にわたって安心して安全に学ぶことができる教育環境の整備が二本柱ということです。

普通科は、大学進学や公務員合格などの進路実現を目指し、2年次から

	<p>国公立大学進学コース、私立大学進学コース、地域創生コースに分かれます。工業科は、機械・土木科とし、1年次から機械専攻と土木専攻に分かれます。商業探究科は、2年次から科目選択とし、現在の取組を更に発展させるというところがございます。</p> <p>説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。</p>
伊藤教育長	<p>そうしましたら、今、高等学校課から全体の部分、特にICTのところになりますが、それと東部地域についての説明がありましたけれども、この説明、それからパブリックコメント案に関しまして、ご意見等ありましたらお願いしたいと思います。</p>
中橋委員	<p>本質的な話では全くないですけども、このパブリックコメント案の中に出てくる年度とか年の表示の仕方なんですけど、元号で全部書かれていますが、今まで全部元号で書かれていたわけなので、それで統一するっていうのもあると思うんですけど、特に統合に至るスケジュールについては、元号で書くと混乱を起こしてしまうのではないかなというのが懸念されるんですけど、その辺りはどのように考えたらよろしいでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>基本的に今の段階で作成するものですので、元号で統一していきたいと現在のところ考えております。</p>
中橋委員	<p>西暦と並列して書くということなんかは、どうなのでしょう。</p>
山岡企画監	<p>またそういったところも、パブリックコメントまでには検討していきたいと考えております。</p>
木村委員	<p>2ページの目指す姿という所なんですけど、私は中山間地域の活性化についても、県外からの移住促進についても全く異論がないんですけど、高校の再編振興計画の中に移住の促進というのが、少し違和感があって。</p> <p>この小項目を、例えばイでしたら、地元で活躍する高校生を増やしていくという項目にしておいて、説明の文章の中で、それが中山間地域の活性化につながるんですよという話だとよく分かります。</p> <p>それとウについても、安心して進学できる教育環境をつくるんだという項目があって、その中身の中に移住促進にも、これはつながっていくことだという説明だと、非常に分かりやすいんですけども、急に移住の促進であるとか、中山間地域の活性化っていうと、少し違和感があります。そこら辺はいかがでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>中山間地域に高校生がいると、高校生も本当に一人前の青年ですので、中山間地域の活性化につながるということです。</p> <p>そして、県外からの移住の促進というのは、子育て世代、特に30代40代の移住の方が高知県には結構多いということもデータとして挙げられておりますので、そういった部分で、県全体としても、県外からの移住の促進にも取り組んでおりますので。中山間地域の活性化、県外からの移住の促進というのも県政の大きな柱でもありますので、そういった趣旨で入れ</p>

	<p>させていただいているところでございます。</p>
木村委員	<p>中身については全く異論はないんですけども、県立高等学校の振興計画という意味合いでいうと、説明の中に中山間の活性化があったり、県外からの移住の促進につながるんだということが入っているというのは、県がやろうとしていることと非常にマッチしているので、悪いことではないんですが、小項目として挙がるのが、少し違和感がないですかという、そういう意味です。</p>
永野委員	<p>木村委員に続いてですけれども、私も全く同じ考えをしまして。県の総合政策は「まち・ひと・しごと創生法」の中から生まれていますし、それを踏まえるというのは、県全体で子育てを十分充実させていこう、という趣旨は本当にそのとおりだと思います。</p> <p>ただ、教育委員会の主体性としては、どういった子どもを育てるか、どういった学校にしていくかということが見出しとしてあるべきだと、私も同感であります。</p>
伊藤教育長	<p>結果として、目指す姿がここにあるということだから。ただタイトルの部分とかの工夫を少ししてみたらどうでしょうということですね。</p>
山岡企画監	<p>分かりました。見出しについては、また検討させていただきたいと思います。</p>
平田委員	<p>2ページで、私も文章解釈能力がないから変に理解するかも分かりませんが、(3)の現在の取組状況というのがございますね。オンデマンド教材の活用ということで、郡部の大学進学を狙える上位層の生徒等が利用可能と。その上位層という言葉が少し引っかかるんです。</p> <p>ここは、大学進学を希望する生徒等が利用可能ではいけないのかと。下位層だったら使えないものかなと感じを受けてしまうので、この辺は公教育として、日本語一つひとつにもう少し配慮していただきたいと思いました。</p>
山岡企画監	<p>分かりました。その部分につきましては、また表記を変更していきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>その部分だけじゃなくて、全体をそういう視点で見ておいくださいね。</p>
山岡企画監	<p>はい。</p>
八田委員	<p>室戸高校とかで特例として、1学年1学級(20人以上)という最低規模が示されていて、学校の最低規模というのは、これまで前期の再編振興計画の時から議論があります。</p> <p>それで、この特例というのは、幾つか例示があって、学び直しの場合であるとか、その地域の過疎化が著しい場合であるとか、幾つか条件があって特例ということになっていて。</p>

	<p>確かに、室戸という地域は人口減少があるんですけども、過疎化が著しくて2学級はもう絶対無理だという予測があるのであれば、こういう方向かもしれないけれども、現状でもう少し学校が魅力化をして活性化すれば、本来の1学年2学級、2学級以上は難しいかもしれないけども、目指すべき姿はできるのではないかなと思っています。</p> <p>安易にどこもみんな特例で、中山間地域は全部特例で1学年1学級（20人以上）というふうにしてしまうと、目標が見えなくなってしまう。要は20人集めればこの学校はずっと存続できるっていう、何かそんなイメージを与えてしまうような気がします。</p> <p>学校によっては、例えば吾北分校であるとか、四万十高校であるとかっていうのは、周辺の中学生在が現実にはいないので、それはもう分かるんですけど、中学生の数が一定数いるのであれば、現時点で特例というふうにはしないほうが良いような気がするんですけど、いかがなものでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>この部分につきましては、「県立高等学校再編振興計画」の基本的な部分、これは前期にも後期にも両方に関わる総則的な部分なんですけれども、その中で本校の最低規模というところがございまして、集団生活による社会性の育成を図ることが大切だということから、基本的に1学年2学級以上は必要であるという大きな原則があります。</p> <p>ただし、過疎化が著しく近隣に他の高等学校がない学校は学びの機会を保障するために、特例として1学年1学級以上を最低規模として維持するとなっています。</p> <p>また、不登校や中途退学を経験した生徒さん、発達障害のある生徒などへの柔軟な対応の支援体制を整えた学校につきましても同じように、特例として1学年1学級（20人以上）ということを書き込みました。</p> <p>前期の時に、各学校の在り方の所にこういった記載を置いておりましたので、その考え方が前期の考え方を引き継いでいるという趣旨で、この記載を置いておるところです。前期の考え方と同じ趣旨だということで、これを置いております。</p> <p>この規定を置くことにより、今のこの本校の最低規模が、その特例がどの学校に適用されるのかというのを、分かるようにしているところでございます。</p>
八田委員	<p>ここで見せたいのは、後期に学校を振興していくための在り方であって、それが、もうこの地域は過疎なので、特例ですから20人以上あればいいですよっていうのは、少し行き過ぎているのではないかなという気がするんです。</p> <p>本当にその地域の中学生在が全部来ても20人ギリギリですよっていう状況であれば、それは確かに特例だと思うんですけど、そうでない地域まで全部特例にしてしまう必要はないんじゃないかなという意見です。またご検討ください。</p>
伊藤教育長	<p>ここは、基本1学年2学級以上という規定の中でありながら、1学級でと上にずっと出てきていて。それは、なぜ1学級規模の室戸高校がここにあるんだというようなところの説明にする意味合いも込めて、そういう特</p>

	<p>例を適用しているということを書いているのですが、一つは、そうなっているから、ずっと1学級でいいだろうというふうに、生徒はおりながらもそうやって思われていくところについて、どうなんだっていうのは、八田委員も言われているところがあるのだろうと思います。</p> <p>要は、室戸が1学級でOKだというところを、ここの部分で説明をするのか。それともどこか、最後の地図の所で規定しているので、そこですかということだと思いますが。</p> <p>双方、それぞれの理由があるような感じがします。</p>
山岡企画監	<p>各学校の在り方の所が、割と振興策で生徒を呼び込むような趣旨で書いているところがありますので、今、教育長からお話がありましたように、別の所に1学年1学級(20人以上)規模というのはどの学校かということが分かるように、この計画の中に盛り込んでおけば分かりますので、それはまた別の所に記載するという工夫もしていきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>そのほかは、よろしいでしょうか。また最終的に、最後に全体をお聴きするようにしますので、中部地域の方の説明をお願いしたいと思います。</p> <p>中部地域は学校数も多いので、二つに分けて説明いただいて協議をしたいと思います。まずは中部地域の前半を、どこか区切りのいい所までをお願いします。</p>

(2) 中部地域 (前半)

山岡企画監	<p>9ページをご覧ください。城山高校でございます。</p> <p>城山高校につきましては、教育後援総会というところで会議を開きまして、こういった振興策を検討していただいたところでございます。</p> <p>不登校経験や発達障害のある生徒への柔軟な対応ができる学校ですので、そこにも書いていますけれども、生徒支援委員会の充実、医師によるアドバイスとか、そういったことを考えております。</p> <p>また、生徒の皆さんへのきめ細かい指導ができるような教育課程を編成するものとして、「ベーシック数学」と「ベーシック英語」を導入する。</p> <p>それから、2年次からのコースであります「社会福祉型」におきましては、資格取得というところで「介護職員初任者研修修了者」を増やす教育内容を充実していきたいと考えております。</p> <p>また、「通級による指導」を導入するということもありますので、学校設定科目として「API (Activities to Promote Independent) : 自立活動」というものを導入する。</p> <p>地域貢献活動としては、地域のイベントなどへ参加して、ボランティアへの積極的な参加もしていきたい。</p> <p>また一番下に、先ほどの1学年1学級(20人以上)という言葉がありますので、ここはまた別の場所に移動するかを検討していきたいと考えております。</p> <p>続きまして、10ページの山田高校でございます。</p> <p>山田高校につきましては、中部地域の東部(香長地区)の進学拠点校というところですので、平成34年度末には目標として国公立大学への合格者</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

50人以上を目指していきたいというところです。

それから、教育AI「エドテック」を通じて生徒一人ひとりに応じた学習をしていきたいと思っております。

地域会で香美市長さんからもお話がありましたように、「香美市学園都市構想」を踏まえまして、探究科を新学科として設置したいと考えております。

今のところイメージとしては、3年間で18単位の探究活動の時間を確保する。そして、難関大学を受験する学力が身に付く教育課程を編成する。

そして、高知工科大学との共同プログラムとして、エドテックを活用したアダプティブ学習、生徒一人ひとりにあったパーソナライズな学習を開始していきたいというふうに考えております。

次に、これは検討段階ですけれども、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の指定申請も検討していきたいと考えております。

普通科につきましては、オンデマンド教材を活用して進学学力の更なる向上を図る。そして、「土曜塾」や長期休業中の進学補習も開講していく。

商業科につきましては、地域と連携した活動を積極的に取り組み、高校3年間を通した「起業家育成プログラム」も開発・実践していく。

そういった取組を通じまして、香美市から高知市に生徒が流れることがないよう、香美市での進学率が上がるように、そして高知市周辺校の核となる学校にしていきたいと考えております。

定時制につきましては、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）との連携を更に強化していきたいと考えております。

続きまして、高知農業高校です。

高知農業高校につきましては、本県の農業教育を担う中心的な学校でございます。「農業を学ぶ」ことによる後継者育成のところから、併せて「農業で学ぶ」というところです。

農業後継者の育成というところでは、キャリアサポート事業や農林業インターンシップ事業などをやっていきたい。そして、規範意識などを重視した人材育成なども行っていきたいと考えております。

地域の農業支援センターとして、地元農家や農業関連機関との連携を図るというところでは、環境制御装置を備えた次世代型ハウスの建設なども取り組んでいきたい。そして、大学や関連企業との共同研究もしていきたいと考えております。

また、六次産業化に対応できる専門性というところで、農業生産工程管理（GAP）教育や食品製造に関するHACCP教育の内容の充実も図っていきたい。

併せまして、進路補習の充実、県の産業振興計画との連携というところで、農業大学校や林業大学校、そしてドローンの活用研究なども実施していきたいと考えております。

続きまして、12ページをご覧ください。高知東工業高校でございます。

高知東工業は、機械系と電気系に特化した工業高校ですので、充実した設備を駆使して、個性的なものづくりを実践していきたい。そして、座学と実習の両方をやるというデュアルシステムやインターンシップによる企業理解を深めていきたいと考えております。

基礎学力の定着という部分では、希望進路に向けた選択科目などの教育

課程を充実していく。

併せまして、産業系の学校ですので、高知県の産業振興計画との連携も深めていきたいと考えています。振興計画の基本目標である県内就職率の促進ということにも取り組んでいております。

そして、部活動の活性化ということでは、部活動加入率の向上を図る。

定時制につきましては、在学中から就労支援や若者サポートステーションとの連携により、キャリア教育の推進に取り組んでいきたいと考えております。

続きまして、13 ページの岡豊高校でございます。

岡豊高校は1 学年 8 学級ということで、一番大きな学級数を持つ学校でございます。多様な学習を可能にする教育課程の編成が必要であり、国公立大学進学から就職までというところで、大学進学に向けた補習から公務員講座の充実まで幅広く対応していきたいと考えております。

また、運動部活動強化拠点校でもありますので、運動部活動指導員事業、そして、部活動サポート事業の活用を図っていきたいと考えております。

そして、丸（○）の四つ目にありますけれども、コース制について検討していきたい。今は1 年次からのコース制ですけども、2 年次からにするのかどうかも含め教育課程と現コース制の検証を、今している段階というところでございます。

そして、大規模校のメリットを生かすというところで、嶺北高校との遠隔授業を開催しておりますので、選択科目における遠隔授業を活用していきたいと考えております。

続きまして、高知東高校でございます。

高知東高校は総合学科と看護科があります。総合学科の特色を生かす、良さを生かすというところで、大学進学などにも対応できる教育課程を編成していきたいと考えております。

特に総合学科については、分かりにくいというような声もありましたので、中学生やその保護者の理解を促すため、体験入学とか中学生への説明会を実施していきたいと考えております。そして、進路を意識した系統的なカリキュラムを編成する。

看護科につきましては、専攻科とあわせて5 年間の一貫教育による看護師養成を行ってきたいということです。実習先の病院の確保なども課題ですので、外部講師の確保も含めて取り組んでいきたいと考えております。

看護師国家試験の対応というところで、これまでずっと合格率 100% ですので、それを今後も維持していきたいと考えておるところでございます。

続きまして、14 ページをご覧ください。高知南高校・中学校でございます。

これまで取り組んできたキャリア教育と国際理解教育を更に発展させていきたいと考えております。

特にキャリア教育につきましては、中高6 年間の教育プログラムを実施しておりますので、さらにそれを充実していく。高校2 年生では、マネジメント学習として地域課題を取り上げて、地域の活性化につなげるというところをやっていきたいと考えております。

グローバル教育としましては、留学生の受け入れによる交流や海外修学旅行、海外語学研修などを実施していく。

また、探究型学習と英語教育プログラムを更に充実させていく。探究型学習では、知識構成型ジグソー法などを実施していきたいと考えております。

そして、平成 33 年度以降の高知南中学校の卒業生につきましては、高知国際高等学校の普通科に入学するということですので、教科会を定期的に行いまして、生徒の学習定着度の確認と検証を行っていききたいと考えております。

続きまして、15 ページの高知工業高校でございます。

工業科として、専門的な技術で専門教育を充実していきたいと考えております。

特にものづくりというところでは、技術競技会や各種コンペなどの指導体制の充実・強化を図っていく。

そして、高知工科大学をメインとして、他の関係機関とも連携の強化を図り、総合的な学習の時間を活用した「探究」も更に充実していきたいと考えております。

高知工業高校につきましても、中部地域の運動部活動強化拠点校ですので、スポーツ医・科学に基づく適切な運動部活動の実施。そして、中学生対象の体験入部を実施していきたいと考えております。

また、工業教育の牽引校として、基礎学力の定着、公務員対策指導にも取り組んでいく。

県の産業振興計画との連携というところでは、地元企業や関係機関と連携した取組を強化していきたい。そして、地元企業の一層理解を深める取組をしていきたいと考えております。

定時制につきましては、技術競技大会、コンテストへの積極的な参加、国家資格の取得に向けた補習指導などを実施していきたいと考えております。

少し長くなりましたので、次の高知追手前高校で一度切りたいと思います。

高知追手前高校につきましては、県内トップの進学拠点校というところですので、そこにも書いていますけれども、学びに向かう力・人間性、思考力・判断力・表現力を、しっかりと育成する取組を実施していきたいと思っています。

高大接続改革の流れを踏まえた探究活動に取り組んでいる先進校に、生徒自ら出向いていく。そして、レオプロジェクト（総合的な学習の時間及び LHR）も更なるバージョンアップをしていきたいと考えておるところでございます。

県民の期待に応える進学拠点校として、ICT 機器の活用などによる授業の質の向上。各教員の教科指導のレベルアップ等を図り、難関大学への進学率の向上を図っていく。

また、遠隔教育を吾北分校と一緒にしていますので、吾北分校の方にも関係しますが、吾北分校の ICT 化に連動した本校側のハード面の充実。そして配信される大学進学講座等を担当する講師の指導力向上を図っていききたいと思っています。

中部地域の前半部分については、以上でございます。よろしく願いいたします。

伊藤教育長	<p>そうしましたら、中部地域、8ページから始まりまして、9ページの城山高校から16ページの高知追手前高校までの説明がありましたので、ここまでの記述等につきまして、ご意見、お気づきの点など、お願いしたいと思います。</p>
永野委員	<p>中芸高校とも関わりがあるので、二つを見てもらいながら、少し東部に戻ってしまうのは申し訳ないですけど。</p> <p>城山高校も不登校の対応のことがまず一番に出てきます。同じような中身で中芸高校のコンセプトも関わってくるんですけども、こういったことで、中芸高校はかなりきめ細かく具体策を、校長先生等がお出しになっていると思うんですけども、城山高校と比べてみると不登校のいわゆる対応というのが、文字数で見えてしまうと大変申し訳ないんですけども、共通した課題があったら、やはり共通したプログラムというのの開発していくようなシステムをつくったらどうかなと感じるところです。それぞれの学校の特色は確かにありますけれども、課題となる大きなコンセプトというか、子どもたちが持っている大きな課題というのは共通項がたくさんあると思いますので。</p> <p>それぞれの学校の特色は生かしつつも、県として、あるいは指導の立場として、開発的なプログラムというの、こちらの方から提案できるようなことがあってもいいんじゃないかと感じました。</p>
山岡企画監	<p>それぞれ学校ごとにも出てきておりましたけれども、やはり同じ、各高校に共通する課題がありますので、高校同士の横の連携も深めるということで、ご指摘いただいたことについては対応していきたいと考えています。</p> <p>ほかの、例えば中山間地域の学校というところでも、各学校バラバラではなくて一緒に取り組んでいきたいというような声も、この地域会の中で、私も聞いたりしていますので、そういう不登校の課題の対応とかいうことも含めて、横の連携も含めて共同開発できる部分は、対応していきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>今の永野委員と少し関連しますが、振興策の粒度というか、ここに記載されている事業の大きさに少しバラつきがあって、今の中芸高校の所だと結構細かいところまで書いているんですね。学校によって、もうちょっと大きい中項目ぐらいで留めている学校もあるけれど、非常に細かい細々項目みたいなどころまで出ているような学校もあります。</p> <p>ここは少し全体として、もう一回、そんな細々項目までというようなことではなくて、もう少し一定の粒度というか、項目の大きさを整理してみた方がいいかなというような感じがします。各委員さんも、うんうんと言っていていただきますけども、そこはそういった見方を、もう一回、事業の大きさというのを整理して、最終的にそれぞれ学校がやろうとしていることを、具体的にどういう手段でやっていくんですかということになると、細かいところまで確認しないと、なかなかそれが本当にできるのかどうかとはできませんけど、パブリックコメントとして全体の検討をするなかでは、そこら辺の各校によってのバラつきがあるような感じなので、そこを少し見ていただきたいなと思います。</p>

山岡企画監	城山高校と中芸高校では、中芸高校の場合は1ページですけれども。夜間部があったりして、ボリュームがあれなんですけども。そういったお話もありましたので、できるだけ差がないような形でまとめていきたいと考えています。
八田委員	具体の細かいことになってしまうんですけど、農業高校の所で、おおむねここに書いてあることは何も問題ないと思うんですけども、今、企業化がかなり進んできているので、農業高校のこの中身に少し欠けているなと思うのは、農業経営的なもの、企業経営的なものが、子どもたちに必要なこれからの能力になるのではないかなど。そういう観点での農業教育というのが、少し入ってきてもいいかなと思いました。
山岡企画監	またそういうところも、学校とも協議していきたいと考えています。
伊藤教育長	あと、完成させるに当たって、かなり専門的な用語とか、なかなか一般の県民の方が見て、辞書を引かないと分からないような言葉が出てくるので、ここは多分パブリックコメントをつくる時に、それぞれの注釈を結構入れないといけないと思うので、最終的に県民の皆様にお知らせする段階の時には、かなり解説というか、それは入れるようにしておいてください。
山岡企画監	注釈をかなり入れるようにいたします。
伊藤教育長	よろしいですか。そしたら、また後ほど全体でお伺いすることとしまして、17ページの高知丸の内高校から中部地域の後半をお願いします。

(3) 中部地域（後半）

山岡企画監	<p>17ページの高知丸の内高校でございます。</p> <p>高知丸の内高校につきましては、「社会に貢献できる人づくり」ということをやっておりますので、慶應義塾大学のSFC「論理コミュニケーション」講座を総合的な学習の時間に導入し、論理的に「聴く」・「書く（構築する）」・「伝える」ということを核とする学力向上を図っていきたいと考えているところです。</p> <p>また、丸（○）の二つ目ですけれども、高知の中心市街地にあるという立地を受け、ポツの一つ目にもありますけれども、高知県立大学とか高知工科大学との高大接続を推進し、学業やボランティア活動などの教育活動を充実させていきたいと考えています。</p> <p>帯屋町商店街とか大橋通商店街との連携活動も推進していくというところでございます。</p> <p>そして、実績のある部活動、体育系の活動としまして、女子ソフトボール部では全国レベルの入賞を目指す。そしてカヌー一部では、全国レベルの大会で入賞を目標にするというところです。</p> <p>音楽科につきましては、声楽（合唱）、器楽（合奏）、それぞれの力量の向上を図り、全国大会出場を目標にするというところです。</p> <p>続きまして、その下ですけれども、高知小津高校でございます。</p>
-------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

理数教育の拠点校というところですので、スーパーサイエンスハイスクール事業（SSH）を核として、学校全体で ICT を活用した授業改善を実践していきたいと考えております。

スーパーサイエンスハイスクール事業の取組の生徒発表会を増加させていく。ホームページで情報配信する。そして、中学生の一日体験入学などによりまして、生徒数を確保していきたいと考えております。

難関大学を含む国公立大学への進学というところでは、お互いに生徒同士が教えあうというような学びの意識を、そういう校風を醸し出していく。そして、教員も授業力の向上に地道に取り組んでいきたいというところがございます。

続きまして、18 ページの高知北高校でございます。

高知北高校の昼間部につきましては、学び直しの場合としての役割を果たしているということもありますので、学び直し講座として「やさしい英語」「やさしい数学」といった基礎科目による学び直しの取組を強化。

そして、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）とのつながりとサポートを実施していく。

また、生徒のニーズも多様にわたっていますので、具体的な進路指導を3年次から2年次に組み入れるというような工夫もしているところです。

そして、個々の生徒の対応について、家庭との連携も密にしていくというような取組をしております。

夜間部につきましては、働きながら学ぶことの重要性というところで取組を進めていますけれども、少人数での授業の充実を図り、生徒一人ひとりの個性に応じた「わかる授業」を実施していく。そして、できるだけ分かりやすくするために授業でプリントなどを補助教材としてつくって、「つまずき」の改善に努めるといった取組をしているところです。

通信制につきましても、きめ細かいレポートの添削指導、スクーリングの改善を推進するというようなことで、地道な取組をしているところがございます。

続きまして、19 ページの高知西高校でございます。

スーパーグローバルハイスクール事業の指定を受けております。リサーチペーパー（論文）の作成などを2年次、3年次で取り組み、探究的な学習の定着や英語教育の充実などを図るグローバル教育を推進している。オーストラリアやイギリスでの語学研修などの、そういった機会も充実させていきたいというところです。

ただし、このスーパーグローバルハイスクール事業は、平成31年度で指定が終了しますので、新たな国の指定事業も見据えながら、成果を生かした取組を推進していくというところがございます。

また、高知西高校も進学拠点校でありますので、一人一台タブレットを実現して学習や評価を ICT 化するというところです。

高知西高校につきましては、平成35年度に高知国際中学校・高校として統合を完了します。

続きまして、高知国際高校・高知国際中学校です。

グローバル教育の牽引校としてグローバル人材の育成を図る。併せまして、一人一台のタブレット PC を活用していくというところです。

国際バカロレア（IB）の教育プログラムに基づいた教育活動を行ってお

りますので、バカロレア教育の先進校での英語教育から学んでいくということ。それから、IB 校内ワークショップなどを実施していきたいと考えております。

そして、進学拠点校として難関大学にも合格できる体制を整えていく。ディプロマ・プログラム (DP)、ミドル・イヤーズ・プログラム (MYP) の授業の質を高める研究も併せて行う。

その下にもありますように、DP は平成 33 年 4 月、MYP は平成 32 年 8 月に認定校になることを目指しておりますので、それぞれ国際バカロレア教育の先進校への教員の派遣、先進校からの情報収集などにも、併せて日々取り組んでいきたいと考えております。

続きまして、20 ページの伊野商業高校でございます。

県内唯一の商業科単科の高校としての取組でございます。少人数制指導、ティームティーチング (TT) を組み合わせ、体系的な学習指導を実施していきたいというところでございます。

行政や大学、企業との連携というところで、そういった専門学校、大学や企業から講師を招いて実践的なビジネス教育に触れる機会を創設していく。

基礎学力の定着という面では、1 年次の普通教科の授業において、その段階から習熟度別学習を実践していきたいと考えております。

「中間とりまとめ」にはなかったんですけども、一番下に「高知県産業振興計画」との関わりを最後に載せております。従来より実施してきた地域貢献活動や観光産業への諸活動について、多様な評価を得られる機会を設置していきたいと考えているところでございます。

続きまして、その下の春野高校です。

春野高校も総合学科ですので、その特性を生かした取組をしており、まず基礎学力の定着というところでは、1 年次から国語、数学、英語の学び直し、それから習熟度別クラスも実施していく。キャリアノートを活用することで、自己管理能力を向上していく。

そして、総合学科の特長である系列によるカリキュラムを生かした指導を充実させ、多様な進路実現を図るために、自由選択科目も充実していきたいと考えております。

総合学科につきましては、ほかの総合学科の学校と同じように、そのメリットを保護者や中学校に理解してもらう取組をするというところで、ホームページと広報活動の充実、そして、特色ある学習成果発表の充実ということに取り組んでいきたいと考えております。

続きまして、21 ページの高岡高校です。

高岡高校につきましても、不登校経験や発達障害のある生徒への柔軟な対応ができる支援体制を整えた学校でありますので、出身中学校や市町村、病院などの外部団体との連携を強化するというところ。

多様な生徒さんがおられますので、国公立大学などへの進学から就職まで幅広い進路希望に応える指導をしていく。そのためには、ICT の活用、習熟度別や進路希望にあわせた個別学習をしていくというところなんです。

高岡高校につきましては、地域会におきまして、地域との関わりが少し希薄ではないかというお声もありましたので、地域に根差した学校づくりを推進していきたいと考えております。土佐市役所や青年団等と連携して、

	<p>地元の取組に積極的に関わり、各種イベントに参加するといった取組をしていきたいところでございます。</p> <p>定時制につきましては、地元企業と連携して、現役生徒の勤労の場を提供していただく。併せて、卒業後の就職先としても協力を願いたいと考えているところでございます。</p> <p>続きまして、22 ページの高知海洋高校でございます。</p> <p>県内唯一の水産科単科の高校としての取組の充実をしていきたいというところですが、土佐海援丸の航海実習を通じて、職業観や勤労観の育成に努める。習熟航海、そして、地域産業と連携したインターンシップを実施していく。</p> <p>地域との関わりというところで、小中学校との連携を図り、地元小学校との体験航海の実施。そういったことで、高知海洋高校を知ってもらって、地元からの生徒の入学ということにつなげていきたいと考えております。</p> <p>基礎学力の定着という部分では、学習支援員による放課後補習、進路指導部による進路補習の実施というところですが。</p> <p>また、県の「産業振興計画」とともに土佐市の水産課とも連携を図っていきたいというところですが。この前の新聞にも出ていましたけれども、一本釣りウルメの天ぷらといったこともありますように、県の渚泊事業における一本釣りによるウルメ、イワシの商品開発なども実施していきたいというところですが。</p> <p>それから、高知海洋高校につきましては、水産高校という特性から教育活動を行ううえで海沿いに校舎を構える必要があるというところで、南海トラフ地震対策ではすごく重要な点がございます。</p> <p>ポツの二つ目にありますけれども、複数の防災の専門家による現地検証なども行いまして、必要な対策の実施と避難マニュアルを作成していく。現状のソフト面の対策、ハード面の対策で十分なのか、複数の防災の専門家による現地検証などを行ってきたいということも考えているところでございます。</p> <p>中部地域につきましては、以上でございます。</p>
伊藤教育長	<p>そうしましたら、高知丸の内高校から 22 ページの高知海洋高校まで、中部地域の説明がありましたので、ここまでについてご意見をお願いいたします。</p>
中橋委員	<p>高知海洋高校についてなんですけれども、22 ページの一番下の○の所の、南海トラフ地震対策に関連するところで、最初に、水産高校という特性から海沿いに校舎を構える必要があるということを書きながら、なお以下で、適地への移転の可能性も含め、在り方を検討していくという話があるんですけれども、そもそものところで、この海洋高校は適地への移転という可能性があるのかという点については、どうなんですか。</p>
山岡企画監	<p>今、現実にはこの場所という所はないんですけれども、南海トラフ地震の被害というようなこともありますので、そういった可能性も含め在り方を検討していく。具体的な移転先があるわけではないんですけれども、将来にわたっての検討課題としては、そういったことも考えなければいけな</p>

	<p>いのかなと思っているところでございます。</p>
中橋委員	<p>「後期実施計画」の期間の中では、とりあえずこの現状の場所で、最大限の予防というのか、それを図っていこうという話だと思うんですけども、ここに適地への移転の可能性も含め、在り方を検討していくと書くと、何か少し方向性が違うのかな、今の場所で精いっぱい安全を確保しようというところに、「後期実施計画」では注力するべきではないかなと思うんですけど、どうなんでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>もちろん今の「後期実施計画」の間は、ここにも書いていますけど、ソフト面の充実、ハード面の充実というようなところがございますけれども、それと並行して移転の可能性も含めて在り方を検討していく、併せて両方やっていくというところがございます。</p> <p>もちろん、ソフト面・ハード面の体制を万全にするのが、まず第一優先だとは思いますが。</p>
伊藤教育長	<p>「後期実施計画」では、今の現在地でやっていきましょう。ただしその代り、万全を期すためにソフト面・ハード面でしっかりと安全対策はやりましょう。ただし、将来に向けて移転が全くないということではなくて、そういうことは検討していきましょうということなんです。</p> <p>後期では移転はなしとして、それらの対策をするようにしているんですけども、将来に向けて全く移転があり得ないということではなくて、津波浸水区域にはあるということなので、そういった移転の可能性については、継続して検討していきましょうというところを、うまく表現していただけたらいいんじゃないかなと思うんですが。</p>
中橋委員	<p>ちょっとすみません。こだわり過ぎかもしれないんですけど、気になったのは黒いポツの所に、適地への移転の可能性の検討の具体策みたいなものがないので、今現在の場所で何とか頑張りましょうよという具体策しか見えていないので、どうなのかなと思った次第です。</p>
山岡企画監	<p>今の時点では、具体的にどの場所に移転の可能性があるとかいうことも、まだないので、ポツの具体策の中には盛り込むことはできなかったんですけども、将来の方向性として、そういったこともあわせて、現実のソフト面・ハード面の対策とともに、将来の対策も考えていきたいというところがございます。</p>
伊藤教育長	<p>多分、現状の実習の在り方をどうしていくのかとか、各科・コースごとにどういうふうに対応していくのか、全てのコースがここにいる必要があるのかというようなこともありますので、そんな中から、移転できる部分もあるというようなことも出てくるだろうし、そういう検討を継続していく必要があるということは、責任として示しておかないといけないのかなというような形での記載だと思います。</p> <p>まずはそこら辺をもう少し、中橋委員が言われるように、検討するって書いておいて具体的なものがないので、そこを明確に分かりやすくするよ</p>

	うに検討してみてください。
山岡企画監	検討するようにします。
永野委員	<p>私の方は、高知国際中学校・高校です。19 ページの方ですけれども、まず一つ目の丸（○）に、グローバル教育の牽引校として云々、というのがあるんですね。そこで1 番目のポツで、一人一台タブレット PC の活用と。ちょっと淡泊すぎるんじゃないかなというふうな、学校それぞれの戦略があると思うんですけども。</p> <p>というのは、16 ページの高知追手前高校にも同じような記載があるんですけども、丸（○）の2 番目、グローバルですけど、具体的に今こういうプログラムをつくるというふうにあって、PC 1 台を持ってきたらグローバル化が図れるような、誤解の生まれるような表現というのは、ちょっとどうかと思います。</p> <p>意図はあると思うんですけども、そこら辺りは注意をした方がいいのではないかなと思います。私は今日初めてですけども、委員さんたちも随分ご苦労なさって、高知国際中高のことは討議を重ねてきていますよね。そういう意味でも、今の内容では淡泊すぎると思います。</p> <p>もう少し理念をきちっと、県民の方にも分かってもらえる、って言ったらおかしいですけど、これまでも十分協議し表現をしてきたものがあるので、この場に出てくると、全ての学校が載っているわけですので、そういうところも意識して記載してもらいたいなと、これは希望ですけど、思います。</p>
山岡企画監	この4 月に開校したばかりということもあって、まだその部分は少し淡泊すぎたのかもしれない。
永野委員	いや、あえて言うけれども、開校したばかりというのはおかしい。もう何年もかけて随分、このグローバルについては討議してきている。それを踏まえないと意味がないし、高知国際中高については、整理してこれまでも発信してきた内容があるのにそれが反映されていないことが問題なので、ここの部分については、強く意見させていただきます。
木村委員	<p>高知国際高校は、高校としてはまだ開校していませんので、ちょっと早い話かも知れませんが、高知の私立の高校なんかでは、海外の大学に入る道筋をしっかりとっている高校なんかもあります。公立高校では、よくここで書いているように、進学校の場合は、難関大学や国公立大学というような表示の仕方が多いんですけども、あえてここには、例えば海外の大学への進学を支援するとか。言葉のうえでもグローバルな教育が高校課程でできないかというようなことをお願いしたい。</p> <p>それと、世界へ羽ばたく高知の子どもたちを支援していくというような意味合いで、そういう項目も少し入れていただいたら夢が広がるのになというふうな気がしました。</p>

永野委員	<p>だから、私も誤解があって言うのではなくて、高校はまだですけど、こういう準備をしていくって言うことが、やはり分かっていかないといけないんじゃないかなと思います。</p>
伊藤教育長	<p>高知国際中学校・高校がこれから計画している取組の方向性については、これまでの整理された内容をここに書けば、両委員が言われていることがしっかりとはまると思います。</p> <p>おそらく新しい再編振興計画という中で、これまでの取組にあわせてというところがあって、ちょっと遠慮して書いているのかなという気がしますので対応させてもらいたいと思います。</p> <p>ただし、そうは言っても、そこら辺は県民の皆さんは分かりにくいところもありますから。今こういう形で取り組んでいこうというものを、取組をここに記載をさせていただければ、そういった形で皆さんに理解されるのかなと思っております。</p> <p>それから、先ほどのタブレットの話は、冒頭言いましたけれども、何か全然、粒度と言いましたけれども、大きい話と小さい話が全般にわたってありますので、まさしくそれも全体を見直してもらって、小さい細々項目みたいなものについては揃えてもらったらいと思いますので、そこをよろしくお願いします。</p>
山岡企画監	<p>高知国際中学校・高校のパンフレットには、例えば目標として海外大学ということも書いていますので、今、委員さんが言われたことを反映させていきたいと考えます。</p>
平田委員	<p>私もいただいた資料を読みながら、ハッと気になりましたので、検討していただきたい。</p> <p>高知国際高校・中学校の19ページ、上から三つ目の丸(○)なんですけど、まだ高等学校は開校してないと思うんですけど、進学拠点校として、という表現なんか果たして、ないものにそういうものを当てはめていいのか。目指して、とかいう表現ではないかなという感じを私も受けました。そこをご検討していただきたいなと思います。</p> <p>それと先ほど、高知海洋高校の津波対応の話が出ておりました、その意見を言ったのは私だと思います。今回、清水高校は浸水深が12m、次が高知海洋高校が8mで2番目に高い浸水深、津波が来るとい学校です。この大きいテーマが地震想定も含んだ検討ということで、高知海洋高校が何も検討しないというのはおかしいのでないかという提案をさせていただきます、事務局が色々検討した方向性だというふうに思っております。それが2点目です。</p> <p>もう1点は、ちょっと読んでいまして、幾つかの学校を見ましたけど、東部の学校ですが山田高校と、高知丸の内高校の振興策の最後に、上記の取組を通して、という表現を使っているんですね。これはちょっと、私は何か違和感を持ちます。山田高校も、上記の取組を通して高知市周辺校の核となる活力ある学校づくりを行う。</p> <p>全ての学校がそうだと思います、その取組を通してという。これを最後へ入れるっていうのは、山田高校と高知丸の内高校だけですね、この2校</p>

	<p>だけ入って、ほかは入らないという不公平感はちょっと感じますね。</p> <p>その辺も、県民に知らせる文章ですので、ご検討いただきたいというふうに思っております。</p>
八田委員	<p>まだ検討中のことだろうとは思いますが、山田高校の探究科というところと普通科というところの、目指すところが非常にかぶっているような感じがしています。難関大学を受験するのか国公立大学へ進学できる支援体制をするのか。</p> <p>この辺りをもう少し整理しないと、普通科を中心に据えた高校にしようとしているのか、探究科を中心に据えた普通科もあるよっていう高校なのか。何か、どう変わるのかが分からないなという感じがします。もう少し高校の方でしっかり検討していただく必要があるのかなという気がします。</p>
山岡企画監	<p>今、山田高校の将来構想検討委員会、あるいは探究科設置検討委員会の中で、高知工科大学の副学長とか、あるいは大谷大学の教授とか、そういった方も交えて協議しておりますので、またそういった議論も深めていきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>その両科の違いみたいなものが、このパブリックコメントの提出までに間に合うわけですか。</p>
山岡企画監	<p>9月18日に次の将来構想検討委員会というのがありますので、そこでどこまでできるのか。この前の会においては、普通科2学級、探究科2学級というようなところで、当初は探究科1学級だったんですけども、探究科も増やしていこうというような議論がこの前あったと思います。</p> <p>その辺の普通科と探究科の役割をどういう形にしていくのかというところを、ちょっと間に合うかは断言できませんけど、間に合えばしていきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>間に合わか間に合わないかという相手て任せではなく、間に合わせてもらわないといけない。それは間に合わないとかいう話ではなくて、どういうふうにやっていくかの手段として、高校の活性化の手段として探究科と普通科という、探究科をつくってやっていこうという話の中の整理なので、そこは間に合わせてもらわないといけない。</p>
山岡企画監	<p>次は9月18日にありますので、間に合わせてもらうようにいたします。</p>
伊藤教育長	<p>ここまでよろしいでしょうか。</p> <p>それでは、次は北部地域の説明をお願いします。</p>

(4) 北部地域

山岡企画監	<p>続きまして、24 ページの嶺北高校でございます。</p> <p>嶺北高校につきましては、嶺北高校魅力化の会というものを何回か開催して、こういった形でまとめたものでございます。</p> <p>嶺北高校につきましては、連携型中高一貫教育校でありますので、小中高の教員による「嶺北 10 年 CAN-DO リスト」などの共同研究を行う。そして、地元中学校との合同行事の開催というところで、地元中学校からも進学率の向上を図っていきたいと考えています。</p> <p>少人数制の利点を生かして、というところでは、地元の自治体との連携による「公設町営塾」なども近々開校していきたくところでございます。</p> <p>それから、岡豊高校と嶺北高校で遠隔教育をしておりますので、更なる充実を図っていく。県教育センターを配信拠点とした遠隔授業、多様な選択科目の配信なども実施していきたく思っております。</p> <p>運動部活動の部分では、カヌー部の活躍というところで、枠囲みの中にも書いていますけれども、カヌー部の全国大会での上位入賞を目標にしているところです。また、地元の自治体から支援を受けていますので、町営寮や地域外の生徒のサポート制度の整備などもしていきたい。そして、カヌー部の受け入れ体制の整備とともに、サマースクールの開催も実施していきたく思っております。</p> <p>枠囲みの中にありますけれども、中山間地域にある学校に共通する項目として、「起業家育成プログラム」と連携した「総合的な学習の時間」の構築。それから、部活動及び農業コースと商業コースの活性化を図っていきたく思っております。</p> <p>続きまして、高知追手前高校の吾北分校でございます。</p> <p>吾北分校につきましても、開かれた学校づくり推進委員会で2回会を開きまして、こういった形で振興策をまとめたところでございます。</p> <p>取組の一つ目としましては、ICT の活用による学校の中での生徒の個別最適化が図られる学習環境の整備というところです。タブレット PC を一人一台配布し、生徒が自由に学習できる環境をつくっていく。</p> <p>それから、取組 2 の遠隔授業の充実というところで、文系・理系いずれの大学にも対応できる選択科目を充実していく。嶺北高校でもありましたけれども、県教育センターをハブ（配信拠点）とした選択科目の配信授業を実施していくということでございます。</p> <p>それから、部活動の本校・分校の合同練習をやっていく。中学校と部活動の合同練習などもやっていくということもあわせております。</p> <p>取組 3 としましては、地元の題材を利用した体験的課題解決学習を教育課程に位置付ける。</p> <p>取組 4 としましては、地元の吾北中学校と吾北分校との教員同士の交流授業の実施をしていく。</p> <p>そして、枠囲みの中山間地域にある学校に共通する項目にありますけれども、取組 5 として、部活動の活性化としまして、吾北分校では、ソフトボール、バトミントンについて、県内ナンバー 1 を目標とするというところです。</p> <p>それから、取組 6 としては、いの町との連携というところで、いの町による高校支援の取組などと連携して、寮整備の検討、あるいは通学できる</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>交通機関の確保というところに取り組んでいく。そういったことを含めて、地域外からの生徒の受入体制を整備していきたいというふうに考えております。</p> <p>そして、26 ページをご覧ください。吾北分校につきましては、2 年連続して入学者が 20 人に満たない状況になっております。これについてどうなのかというようなことも心配される保護者の方がおられると思いますので、「後期実施計画」における考え方をそこにまとめております。</p> <p>分校として、2 年連続して入学者が 20 人に満たない場合は、その翌年からの募集停止を検討するという基準につきましては、これまでの協議内容を踏まえまして、基準としては尊重するけれども、分校は小規模が前提となっているから、もう少し頑張ってもらおうというところですよ。</p> <p>本校と連携を図る、あるいは分校としての振興策を図る、そして地域からの支援もあるということもありますので、「後期実施計画」期間中は、その取組の成果を検証しながら、基本的には継続するというようなことで、「後期実施計画」につきましては、そういう判断をさせていただきたいと思っております。</p> <p>北部地域につきましては、以上でございます。</p>
伊藤教育長	<p>はい。それでは、ただ今の北部地域につきまして、ご意見等をお願いいたします。</p>
八田委員	<p>先ほども議論があった、タブレット PC 一人一台ということが出てくるんですけども、イメージとしては、これは入学したらもらえるみたいなイメージですか。学校にあるから使えるということですか。</p>
山岡企画監	<p>学校にあるから使えるというところですよ。</p>
八田委員	<p>これは中山間地域にある学校に共通する項目として、ICT の活用ということでこれを挙げているわけで、それがもちろん後で整理されると思うんですけど、この学校に行くと 1 台あって、この学校はないよというのは、何かすごくおかしな違和感がある。</p> <p>もしやるのなら、せめて、例えば中山間地域で共通に取り組むべき学校だったら、同じような環境が整った方がいいと思うし、あるいはもっと言うんだったら、高知県の公立高校はみんな同じような環境が整っているという方がいいと思います。</p> <p>個々にうちの学校はこれをしますっていう、取り上げるようなものではないのかなという感じがしますので、何か共通枠をつくっていただきたいと思っております。</p>
竹崎課長	<p>委員のおっしゃるように、特にこの中山間の学校につきましては、统一的に ICT の活用をしていくというような方向性でおりますので、できるだけ、なかなか予算の関係もございますので、すぐ全てにまんべんなく配布できるか、配置できるかというのは難しいところもございますけれども、将来的にはどこの学校でも使えるような形にしていくのが、あるべき方向性かなと思っております。</p>

伊藤教育長	<p>私が言うのはあれですけど、基本的には、将来に向けてそういった整備を進めていくものだと思いますが、タブレット PC を入れて成績が上がるのかと。上がるという根拠を見せてもらった所からだと思います。</p> <p>だから、PC を入れれば、それで成績が上がるというものではないので、どういうふうを活用して、どういうふうやっていくかというところが見えてこない、なかなか導入当初の予算化というのは、限られた予算の中で要求しにくいということがありますので。導入ではなくてどう使っていくのかというところが、求められるところになってくると思っております。</p> <p>それがあったなかで、成果が出てくるところで、やはりそれは全県に配備していくべきだというような議論になると思いますので、将来的には、今の状況でいくと、タブレット PC をそれぞれ皆さんにという格好にはなっていくと思いますけど、まずはどういうふうを活用していくのかというところが、この計画を実現していくなかでの議論になっていくんだらうと思っています。</p> <p>そのほか、ございますでしょうか。</p>
八田委員	<p>その取組に、教育センターをハブとして選択科目の配信授業みたいなことをやるということがあるので、ICT の活用は、確かに教育長さんがおっしゃるように、買えばいいというものではなくて、どう生かすかだと。</p> <p>ただし、そこを学校にだけ丸投げするのではなくて、やはり高知県全体として、こういうコンテンツが充実している、こんなふうに使いができるっていうものが、ある程度オファーされないと、学校独自で、本当に少人数で頑張っているところに押し付けるのはちょっと苦しいのかなと。</p> <p>その一つの方策というかアイデアが、教育センターがハブになってそういうものを供給しようということだと思うのですが、そうすると、これも吾北分校に限って書くべきことではなくて、県の ICT の活用施策として、こういうものを一つ挙げますよと。これはどこの学校も工夫して使えますよ、という位置付けにしないとおかしいような気がします。</p>
山岡企画監	<p>教育委員会事務局の方としても、ここに書いていますように、県教育センターをハブとした配信ということを考えておりまして、その一つの例として学校の方に示したものです。こういったことも考えられるのではないかとことです。</p> <p>そういったことで、学校の方としても、県教育センターを配信拠点とするというのは、それぞれ学校としてニーズがあるのかどうかを含めて、今回聴いたところです。</p> <p>そういったニーズがあるというのは、ここで挙がってきている嶺北高校ですが、個々の学校同士でやるよりは、センターでやっていただいた方が効率的ではないか。先生の負担も軽減できるのではないかとというような趣旨で、こういった話が挙がってきたのかなと思っております。</p>
伊藤教育長	<p>冒頭、全体の所でご説明をさせていただいたと思いますけど、事務局としては、県教育センターをハブとした遠隔教育システムを構築します。</p> <p>その中で、事務局として色々なメニューを想定して、その準備はしているんですけど、それぞれの学校において、学校を活性化するために、ど</p>

	<p>ういった遠隔授業であったり、内容・活用があるのかというところを各校に考えていただいたということです。</p> <p>そういったなかで、想定される全ての遠隔授業を準備することはできませんし、準備しても各校にニーズがなければ使われませんので、整備してもシステムとして利用されないシステムになっていくと。</p> <p>ですから、各校において、それぞれ各校の活性化に向けて具体的な、どういう使い方をされるんですかというところを今回聴いておりますので、それが出てきたニーズを中心に整備をしていくという流れになっていくと思います。その中で、大体全ての学校が活用という格好になっています</p> <p>ですから、やはり小規模校のデメリットを克服していくために、遠隔授業を活用していく。そのための基盤整備であったりシステム整備であったりということです。</p> <p>それから、例えば各校の先生にお願いしてやるというのは、現実的には、各校の先生は自分が授業を持ってやっていて難しいので、やはり県教育センター的に集約をしていく必要があるだろうというような形での、構築を取り組んでいこうと思っています。</p> <p>その内容であるとか、数量、そういったものについては、一定ニーズを集めたうえでスタートしないと、なかなか無駄になりますので。そういったなかでの取組ということです。</p>
木村委員	<p>うまく活用しないと無駄になる可能性も大いに見えていることだというのは理解できますけれども、中山間や郡部の学校を将来活性化していくためには、地域にある中学校からどれだけの比率でその高校へ入ってくれるかが重要です。</p> <p>それぐらいの魅力化をどうやってつくれるかということと、教育のレベルを、要するに ICT を使っていかに中部地区の学校と同等、もしくはそれ以上の教育環境をつくってあげられるかという、この2点にほぼ集約されるような気がするんですね。</p> <p>そういう意味合いでは、どういう提案を持ってきたら通るとかそういうことではなくて、やはり、そういうものが本当に必要であろうという地域の学校には、逆にこういう使い方をすればいいんじゃないかというような、事務局からの提案といいますか、指導というか、そういった使い方を個々に指導してあげて、それをうまく活用させるということが、本当はもっと大事なのではないだろうかという気がします。</p> <p>1校2校でスタートするというのが、何となくちょっと違和感を感じます。</p>
伊藤教育長	<p>1校2校でスタートする気持ちは全然ないです。それはもう県域全体で。整備する費用がどうなるのかということもありますけれども、1校2校ということではないです。</p> <p>それから、活用方法についても、具体的にこういった活用方法があるし、考えているということについては、各校にお示しをしています。</p> <p>意見が出てきましたので、それらを踏まえて、具体的などういうカリキュラム、どういう内容のものをどういった頻度でというのは、これから詰めていくことになりますけれども、しっかりとニーズがあるということも踏</p>

<p>各委員</p> <p>伊藤教育長</p>	<p>まえて構築していかないと、これから、事務局としても財政当局との折衝もありますのでしっかりとした準備も必要になります。</p> <p>そういったなかで、中身がないままなかなか折衝もできませんから、そこを詰めていかせてもらっているというような、そういった状況です。</p> <p>ですから、1～2校でやるということではなくて、もちろん投資をしてやりますから、県内全域で活用されるようなものを目指して取り組んでいきます。</p> <p>北部地域の2校ですけれども、ほかございませんでしょうか。</p> <p>〈意見なし〉</p> <p>そしたら、高吾地域をご説明いただけますでしょうか。</p>
-------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(5) 高吾地域

<p>山岡企画監</p>	<p>では、28 ページをご覧ください。須崎総合高校でございます。</p> <p>須崎総合高校は、ご存知のとおり平成 31 年 4 月に開校いたします。高吾地域の進学や就職、産業教育、部活動の拠点校として充実した教育活動を行っていきたいと考えております。そのため、総合的な学習の時間の発表会や、課題研究発表会なども実施していく。そして、部活動の加入率などを上げていくというところ です。</p> <p>普通科におきましては、進学拠点校として国公立大学のへの合格者を 30 人以上輩出したい。そのためには、進学協議会への研修の参加などにより、教員の指導力を向上させていきたいと考えております。</p> <p>工業科におきましては、ものづくりや資格取得の取組というところで、今でも就職率はすごく高いんですけども、それを更に進めていく。そしてキャリアアップ事業として、インターンシップや企業見学などを実施していく。資格取得にチャレンジする生徒を応援していくというところ です。</p> <p>県の「産業振興計画」等の取組というところでも、企業等との連携した教育活動を実践していきたいと考えております。</p> <p>地域との連携では、ドラゴンカヌーの取組の継続というところ。そして、防災避難訓練の充実では、避難経路調査とか HUG（避難所運営訓練）といったこともやっていきたいと考えております。</p> <p>定時制につきましては、在学中からの就業指導といった取組を充実させていきたいと考えているところ です。</p> <p>続きまして、佐川高校でございます。</p> <p>佐川高校は、「いのち輝け～さくら咲くプロジェクト～」ということで、地域に根差したキャリア教育を実施しておりますが、これを更に継続させていく。</p> <p>基礎学力の定着・向上という部分では、地域の 4 町村から原資として拠出していただいたお金を検定料の全額補助だけではなくて、進学補習の講師料、あるいは海外留学にも拡充していくという取組を考えているところ です。</p> <p>そして、学校支援地域本部事業を活用して、地域連携コーディネーターや高知大学との連携も図っていく。</p>
--------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

中山間地域にある学校に共通する取組としましては、遠隔授業を検討し、それを踏まえて難関大学合格を目指す学習環境を整備していく。そして、地域外からの生徒を確保する方法としては、地質の宝庫佐川町を生かした取組をしていく。部活動の面では、男子ソフトボール部を活性化するため、全国大会優勝を目指し、クラブチームや大学生、日本代表との合同練習も考えていきたいというところがございます。

定時制につきましては、佐川町の地域支援ネットワークに参加して、地域と連携した生徒育成を推進していきたいというところがございます。

続きまして、30 ページの窪川高校でございます。

窪川高校では2年生から、地域リーダー養成コース、進学コースという、コース制をとっておりますが、こういったコース制によるきめ細かな指導を充実させていくというところなんです。

地域リーダー養成コースにつきましては、農業系と商業系の教育課程を見直し、資格取得、起業家育成、インターンシップに取り組んでいきたい。進学コースにつきましては、夏季休業中の県外の大学への訪問や企業研修などを実施していきたいと考えております。

部活動の充実というところでは、音楽部とかサッカー部に力を入れていく。併せまして、地域課題解決学習を通じた地域との連携を、これまで以上に図ってきたいというところなんです。

そして、公設町営塾との活用というところでは、「じゆうく。」という公設町営塾があるんですけども、そこで個別学力指導や探究学習を実施していきたいということです。

また、窪川高校と四万十高校につきましては、遠隔授業を行っておりますので、そういった遠隔教育システムを利用した難関大学受験にも対応できる学力をつけていきたいと考えております。

中山間地域にある学校に共通する項目としましては、他校との協働による進路指導やオンデマンド教材をより活用するといったこと。

地元中学校からの進学率を上げるというところでは、現在、窪川中学校からの進学率が30%ぐらいですので、これをまず引き上げる。そして、四万十町の生徒育成プラン「四万十町児童・生徒育成プラン(仮)」との連動を図る。魅力化PRコーディネーターや地域コーディネーターによる情報発信を行っていくというところなんです。

そして、四万十町による高校支援策等の発信力強化を一緒に図ってきたいというところがございます。

続きまして、31 ページの檮原高校です。

檮原高校については、地元の檮原中学校からの進学率が90%を超えるという状況にあります。

一番上の丸(○)にもありますけれども、地域学習「YELL プロジェクト」を行い、地域に根差したキャリア教育を実践しており、地域や学校をPRする商品開発やPV(プロモーションビデオ)を制作する。そして、中山間地域小規模モデル高校となつて、「わざわざ檮原へ」というようなことを実現していきたいというところなんです。

平成31年度から理系・文系大学へも進学できる教育課程を編成。併せまして、医療系大学・難関大学への進学希望にも対応できる個別の学習計画を作成していきたいというところなんです。

そして、栲原中学校と東津野中学校との連携を更に深め、学力の定着と6年間を見通した進路指導を実施していく。

また、栲原町の取組（寮の整備）などについても検討し支援をしていくことで、野球部を中心に地域外の生徒の受け入れ態勢を整備していきたいところです。

中山間地域にある学校に共通する項目としましては、遠隔教育システムを利用した他校との交流により、英語ディベート力、スピーキングスキルの向上を図っていききたいところ。

そして、三つ目の丸（○）ですけれども、野球部の取組を更に充実して、今以上に地域外の生徒の入学を促進していきたい。そして、高校、町（地域）及び行政が一体となって、広報活動を更に充実させていきたいと考えているところです。

続きまして、32 ページの四万十高校でございます。

連携型中高一貫教育を継続するということで、中高一貫教育での教育活動による学力向上対策を実施していく。

そして、自然環境コースにおける環境保全に関する実践学習を充実していく。併せまして、現地調査（環境調査）や農林業での活用に向けたドローン技術の習得を、地域での意見もありましたので、そういったことも考えていききたいところでございます。

窪川高校でもありましたけれども、地域や公設町営塾「じゆうく。」と連携して探究学習や海外研修、カナダへ今年行きましたけれども、そういったところも取り組んでいく。

そしてクラブ活動としては、ソフトボール部や音楽部（ジャズ）に一流の指導者を招聘し、レベルアップを図っていくところでございます。

中山間地域にある学校に共通する項目としましては、教員配置が困難な科目で遠隔授業での履修を実施して、進学希望にも対応していく。町の「四万十町児童・生徒育成プラン（仮）」の策定にも関連させていく。そして、生徒募集に関する情報を全国に発信する方法を確立していきたいというところでございます。

また、県及び四万十町の協力による情報発信等、学校の魅力を十分に周知して、県内外から生徒数を確保できる取組を推進し、振興策においては、県と町とも連携していきたいところでございます。

この後、前回の議論の続きにもなりますけれども、窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について、少しご説明させていただきたいと考えております。

33 ページをご覧ください。在り方につきましては、上の点線枠囲みにもありますように、窪川高等学校と四万十高等学校につきましては、条件付きで継続するというようにしたいと考えております。

その考え方としまして、一方では、窪川高校、四万十高校については、1校としての規模が小さく、現在は両校あわせても実質1学級規模の生徒しかおらず、高校教育の質を確保することが難しいという状況があります。

将来的にも生徒数が減少していくことが予測されておまして、学校の活力が低下していくことも考えられる。今後も充実した教育活動を維持していくためには、一定規模（生徒数）を持って、活力ある教育活動を展開することが必要であります。

	<p>ただ一方では、高等学校は、地域における教育の拠点であるとともに、住民の生活にも関わる大切な施設でもあります。特に中山間地域においては、人材の育成という点で、高校の存在意義はとても大きいというところ です。</p> <p>そして、最初にもお話がありましたけれども、中山間地域においては中山間地振興の核ともなり得ることから、少子化のなかにあっても可能な限りその機能の維持、拡充を図ることが重要だと考えております。</p> <p>これらのことも踏まえまして、今後とも地域に根差した学校として、様々な教育活動に取り組んできた窪川高等学校と、連携型中高一貫教育を通じて、生徒の育成に取り組んできた四万十高等学校を地方創生の核として、地域の良さを学びコミュニティを支える人材を育成することを目的に、地域振興策の核としての高等学校の機能を強化していきたいと考えております。</p> <p>目指す姿としては、高等学校は、地域人材の育成において重要な役割を担うとともに、高等学校段階で地域の産業や文化等への理解を深めると、その後の地元定着やリターン等にもつながるといことが言われています。</p> <p>このため、高校が地域と連携しながら、地域課題の解決に取り組む探究的な学びを提供するカリキュラムの構築を行うとともに、地域の魅力に触れる取組を推進して、地域に根差した人材の育成を図る。</p> <p>また、地域貢献活動などにより、地域に活力をもたらし、移住促進に向けた施策や地域活性化の施策を展開できるよう、活力ある教育活動を展開していきたいと考えております。</p> <p>そして、地域の方々から信頼され、地域内の中学校の生徒が行きたいと思う学校づくりを推進し、地域内の中学校からの進学率向上を目指したいというところ です。</p> <p>併せまして、四万十町と協力しながら振興策に取り組み、地域外からの生徒の確保にも努めていきたいと考えております。</p> <p>そういったこともありまして、条件ということを書いた所にも書いてあります。条件としましては、今後、教育課程の見直しや、学校・地域による振興策の取組によっても、定員充足状況が改善されず、継続的な教育効果が得られないと判断された場合は、窪川高等学校と四万十高等学校を統合し校地を一本化するなど、教育の質の向上に必要な対策を講じることとしたいと考えております。</p> <p>説明は以上でございます。</p>
伊藤教育長	<p>そうしましたら、ただ今の高吾地域の説明につきまして、ご意見等をお願いいたします。</p>
中橋委員	<p>窪川高校と四万十高校の在り方についてのところなんですけれども、ここに条件ということで先ほどご説明がありました、これは何か有って無いような条件のように聞こえてしまうんですけれども。</p> <p>結局、今回色々な議論をして、第1案～第3案まで案が出たのは、継続的な教育効果が得られないという判断も一つにあって、その三案が出されたと思います。</p>

	<p>それで議論をしていくなかで、それぞれ残しましょうということになったという議論の過程を考えると、またこういう統合をしなければいけないんじゃないかという状況になった時に、またやはり残そうという話に、この条件だったらなり得るんじゃないかなというのをすごく感じます。</p> <p>四万十町の町長さんの方もかなり背水の陣で意見を出されているように、こちらもやはり、もう少し明確な条件というものを出さないと。それが何年とかいう、あまり厳格なものじゃなくてもいいんですけど、もう少し絞られた条件というのが提案できないのかなと感じるんですが、その辺りはどうでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>特に全然、もしこの定員充足状況が改善されず、継続的な教育効果が得られないということが、「後期実施計画」中にもそういった状況が起これば、校地を一本化するなど、教育の質の向上に必要な対策を講じるということも含んでおるといことです。</p> <p>定員充足状況が改善されるというのは、例えば人数は何人なのかということまでは明示はしてないんですけども、「後期実施計画」においては、そういった状況が改善されないということが判断されれば、そういった対策を講じるということも、ここに盛り込んで条件にしたところでございます。</p>
中橋委員	<p>そうなると、教育委員というのは、いつの段階でそれを判断することになるのでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>これは一定、四万十町、学校、県でも振興策に取り組んでいく必要がありますけれども、それはもう随時といいますか。</p> <p>「後期実施計画」期間中においては、そういった継続的な教育効果が得られているかどうか、定員充足状況が改善されているかどうか、これを「後期実施計画」期間中においても検証していく必要があるのかなと思っております。</p>
中橋委員	<p>ちょっと言葉が難しいんですけども、何年ごろをめどにとか、何か少しそういうのを入れることは不適切なんのでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>四万十町からも想いというのがありまして、まず「後期実施計画」期間中は存続ということで、町営塾「じゆうく。」なども踏まえた振興策へも取り組んでいきたいというようなところがありました。</p> <p>一方では、生徒数の減少による教育の質の担保というところもありますので、そこは平成 35 年度とか、そんなことは明示しなくても、この「後期実施計画」期間中においてもきちんと検証していくということです。</p> <p>四万十町の想い、それと一方では教育の質の担保ということがありますので、そういった両方の条件を満たすというようなところで、こういった表現にしているところでございます。</p>

伊藤教育長	<p>今、説明で「後期実施計画」期間中においてもと言うけれど、これは文章に出てこないですね。それを書く予定はないわけですか。口ではずっと、「後期実施計画」期間中においても何回も言ったけれども、この文章にはないので誰にも分かりませんよね。</p>
竹崎課長	<p>申し訳ありません。現状では文章の中にはございませぬけれども、委員の皆様方のご意見もお聴きして、そういった必要性があるというようなご意見があれば、記載もしていく必要があるのかなと思っております。</p> <p>それから、条件面でももう少し限定的にということであれば、例えば分校の2年連続して入学定員を割った場合には、というように条件を明確にするとか、そういったこともまだ検討の余地はあるかと思っております。</p>
伊藤教育長	<p>四万十町からの要望というか、ご意見からすると、「後期実施計画」中については取組をさせていただきますということでしたよね。</p>
山岡企画監	<p>そうです。</p>
伊藤教育長	<p>だから、そういうことがあったので、少なくとも「後期実施計画」中は、という話なんだけれども、「後期実施計画」中にずっと置いておくと、終わった段階で、じゃあそこから統合しようかという、3年かかるわけですね。</p> <p>そうすると、「後期実施計画」中であっても、そういった判断をし、必要な対策は講じることができるようにしておくことが必要だと思われる。例えば「後期実施計画」が終わった後に、統合があまり時間を置かずにできるようになるわけですから。</p>
山岡企画監	<p>はい、そうですね。</p>
伊藤教育長	<p>そこら辺を何かうまく表現できますか。</p>
山岡企画監	<p>それについても、また検討していきたいと考えています。四万十町の意見が気になるところもありますけれども、そこも含めて検討していきたいと考えています。</p>
伊藤教育長	<p>検討と言っているが、次の9月の教育委員会までに出てきますか。</p>
山岡企画監	<p>ただし、9月11日まであまり日がないですけども、そういう方向で取り組んでいきたいと思っております。</p>
伊藤教育長	<p>前回の協議会の中で存続と決まったところでいくと、色々取組について着手し始めたところで、これからやっていくので、この後期の間は成果をみてほしいという話の中で存続というふうになっていますね。</p> <p>だから、その中で一定条件をつけていかなければならないので、そこは大事に考えておいてもらわないと、前回のこの協議会の中で決定した時の話と食い違ってくるかもしれません。</p>

八田委員	<p>今の点がよく分からないんですが、条件付きで継続するという事は、「後期実施計画」中も、ある状況では継続しないということになってしまうような気がするんですけども。</p> <p>四万十町の意欲を買うのであれば、「後期実施計画」中は現状で継続するという事のような気もするんですが、そこがよく分かりません。</p> <p>それと、定員充足状況について確認したいんですけど、四万十高校に関しては、高校とのいろんな議論の中では、1学年1学級（20人以上）の最低規模を維持するというのが、もうミッションだと思うんですね。ここで2クラスなんてあり得ないことだと思うんです。そうすると、四万十高校はここでいう定員充足状況というのは、1学年1学級（20人以上）とするのでしょうか。</p> <p>一方で、窪川高校がちょっと微妙なんですけど、窪川高校の所の記述としては、質を確保するための1学年2学級以上、これが定員であるので、これを充足するというのが窪川高校は目標であって、やはりこの下に、特例として1学年1学級（20人以上）最低規模と書いてあって、これがもし定員充足状況となると、大分話が変わってしまう。</p> <p>窪川高校の問題はむしろ、窪川中学校からたくさん来れるはずなのに来ていないので、もっと窪川中学校から進学してもらわなければならない。そうすると、目標は1学年1学級（20人以上）ではなくて、本来の2学級を維持するべきだと思うんですね。</p> <p>そうすると、さらっと書いてあるけれど、定員充足状況というのがこの2校では目標が違って、窪川高校は本来の2学級をちゃんと維持するべきだし、四万十高校はギリギリ何とか20人以上を確保するべきだ、というふうに理解するんですけど、それでよろしいでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>はい。最低規模を下回るということになりますと、募集停止も検討しないといけないということもありますので、まずは最低規模20人以上をクリアする。</p> <p>ただし、さらには標準として1学年2学級というのがありますので、まずは最低規模をクリアしたうえで、本来あるべき姿である2学級を目指すというところがございます。まずは最低規模を満たすということで、20人以上はもう最低クリアしていく必要があると思っています。</p> <p>四万十高校につきましても、まずは20人以上というのを満たしていただく必要があると思っています。</p> <p>窪川高校につきましては、1学年2学級規模ですので、80人の定員を埋めるような努力をお願いしたいと考えております。</p>
八田委員	<p>そういった考えは一切書かれていないので確認しました。では、とりあえずそれなりの方向で、定員充足状況の改善という目標は少し違うというふうな理解でいいですよ。なおそれなら定員ではないと思うので、その辺りの表現も修正をお願いします。</p> <p>それから、最初の話ですけど、条件付きで継続するというのは、この「後期実施計画」中も、途中で継続しなくなるということがあるという意味で、これは書かれているのか。それとも「後期実施計画」中はとにかく継続するんだと。その後のことを考えるための条件はこうですよ、なのか。ちょ</p>

	<p>っとそこがよく分からないなという気がしますけど、どちらが理解としては正しいのでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>基本的には、この「後期実施計画」中も継続するというようなことが原則です。</p> <p>ただ、著しく定員充足状況が改善されない、その充足できない状況が著しいような、これでは教育の質の担保もできないというような状況になり、どうしても継続できない、教育効果が得られないというような状況になれば、それは「後期実施計画」中であっても放置しておくことはできないだろうということで、そういった含みも残しておくというようなところでございます。</p>
伊藤教育長	<p>よろしいですか。まずこの後期の5年間に統合することは現実的にはないと思います。</p> <p>だけど、その5年間、後期の間は検討しないというふうになると、その5年を終わって、じゃあそこでまた、こういう議論があるわけですね「教育委員会としてどうしますか」という。</p> <p>5年経って、統合しましょうとその年に決まったとしても、在校生がいるので実際の統合まで、また3年かかるわけです。そこなんです。8年かかるんです。</p> <p>そしたら、後期の中で充足状況が間に合わないということが明らかになっても、5年間着手せず5年後に何かして、3年後から統合しますよというふうになると、すごく充実した教育ができない期間が続いてしまうということです。</p> <p>ですから、決めて3年かかるということなんですよ。ということですよね事務局。</p>
山岡企画監	<p>はい。例えば、統合すると決まっていなかった状況で高校に入学した場合、その生徒が途中で、2校が1校になることで転校というか、学校の位置が変わるということがないように、入った学校で卒業するというような方針でいった場合は、決まってから3年ぐらいは猶予が要するということです。</p> <p>例えば、平成36年で統合すると決まったとしても、実際に統合が完了するのは平成38年になりますので、それはちょっと長すぎるのではないかなというところで。</p> <p>そういった時間的なことも考えまして、「後期実施計画」期間中であっても、そういった検討はできる余地を残しておくということです。</p> <p>統合ということも、状況によっては検討するというのを、含みを残しておくというところでございます。</p>
八田委員	<p>そうすると、やはり特に厳しいのは四万十高校だと思いますけれど、この「後期実施計画」中も20人を3年間のうちに2回ですか、2年続けてですか、下回ったらその時点で、統合の議論が始まるという理解でいいですね。</p>

山岡企画監	<p>そこは、例えば何人でというのは一律に 20 人とか、20 人というのが 2 年ですとか、3 年ですとかいうことは、数字として明記はしないですけど、普段に検証していくということで。そこはもう数字を出していくということとは、この今の案ではしてないというところです。</p>
八田委員	<p>何か逆で、ちゃんと数値目標を出してあげないと、地域としてどうしていいかが分からなくなってしまうと思うんです。</p> <p>もちろん目標は出したけども、非常に惜しいというのであれば、まだ議論の余地はあるかもしれないけれど、何か漠然と教育効果が得られないと判断されるという、そういうイレギュラーなところは分からないなという気がするんです。</p> <p>そうすると、結局アクションが起こせない。そうすると、次のステップに進めなくなってしまうので、やはり、条件を付けるのであれば、もっと明確な条件にするべきではないかという気がします。</p>
木村委員	<p>窪川高校の場合は、今、地元の中学校からの入学率が 20%台ということで、地元の中学校からも選ばれていない。これについては、行政も挙げて一生懸命やろうということですから、将来へ向けてのある種希望はあるし、可能性はあると思うんですね。</p> <p>四万十高校の場合は、もう中学校の卒業生自体がどんどん減って行って、予測でも平成 31 年度は 16 人、平成 32 年度は 14 人。はっきり覚えてないですけど、そういう見通しがあるわけですね。</p> <p>それで、地域に何とか高校を残していこうということで、1 案から 3 案までの中で二つの案を残してきて、結局、町の強い意志で 1 案になったわけですけども、このままいくと、この条件をどうということにするのかは別にして、もう明らかに四万十高校においては、存在し得ない高校になっていくのが、ある意味目に見えるわけですね。</p> <p>そうじゃなくて、地元の中学校ではこれくらいしか生徒がいなくても、プラスよそから何人来て、全部入れても 17 人か 18 人だけでも地元からは全員来たよとか、何かそういうことで学校は残っていけるんだというような、将来に対する希望がないと。</p> <p>現時点では、学校は残すけど、教育内容がこう変わる。こう魅力化されるという案も出ていない状況では、これだと、また近いうちに統合ですよというのと、ニアリーイコール（ほぼ等しい）ではないだろうかという気がします。</p> <p>非常に、窪川町長の想いもすごく分かるし、莫大な金額を投資していただいて、地元の高校をなんとかしようという熱意は、非常に分かるんですけども、結局それがあだになりはしないかというような、強い危惧をします。</p> <p>あまり読み取りにくいような条件を出すよりかは、どうやって応援していくかというようなことの方がむしろいいのではないのでしょうか。条件をつくってしまうと、必ず来年か再来年には見直さなければいけないような気がします。</p>

山岡企画監	<p>今の大正・十和地域の中学生だけでいくと、なかなか将来的には厳しいところがあります。</p> <p>ただし、学校、あるいは地域の方とも、地域会の方にも出て話を聴くと、やはりもうちょっと頑張らせてもらいたいというような。それに向けては、県外からも生徒を呼び込むことも最後までやりたいというような想いもありました。</p> <p>四万十町の方はそういった想いがあり、今まで公設町営塾とか高校応援大作戦ということをやっていましたけれども、それが道半ばということもありましたので、「後期実施計画」期間中は存続したうえで、取組を実施させていただきたいというようなことでしたので、それを尊重した形で、今の案ができていますところをございます。</p> <p>実際に県外からの生徒を呼び込むようなことを、四万十高校としては、本当に真剣になって考えていただく必要がある。そういう、県外から生徒を呼び込むということが前提の振興策という形になろうかと思えます。</p>
木村委員	<p>しかし先ほども申したように、具体策や振興策は出されていないので心配しているところです。</p>
伊藤教育長	<p>具体的な、例えば20人を維持するという言葉を書くのか、それから何年度、例えば平成35年度の後期の終わりの所で成果を判断すると書くのか、色々今までの議論の中ではそういったことが考えられますので、前回の協議会の中では、おそらく町の意見では「後期実施計画」の終期で判断をいただきたいというお話でしたし、それには当然一定の人数を集めるのだと覚悟もお持ちだろうと思えます。</p> <p>よって、一定の人数をどうするのかということを決めていくのか。決めるということは、やはり一つの目標にはなると思うけれども、数字を決めてしまうとガチガチになっていくのかなというようなことも考えます。</p> <p>ただ一つは、両校存続となったということについて、一定の猶予期間というか、取組をやらせてもらいたい期間を置いてほしいということだったので、何らかの期間的なものは決めなくてはいけないのだろうなど。どこでもう一回見直すのかと。それは、中橋委員がそういうことだったと思えます。</p> <p>あと、八田委員の方では、やはりやるにしても、きちんと目標数値を設定してあげた方が親切だし、それを目指してやるだろうから、人数的なものについてもきちんと明確にしておくことだろうと思えます。</p> <p>四万十町としても学校としても、努力をしていくにあたって、期間と一定の目標数値みたいなものを、もう少し明確に示したうえで、書き込んでいかないといけないのかなと先ほどの議論からは考えました。</p> <p>ほかの地域とか学校とは、ここまで来る経緯が違いますので、そういった格好で、次の教育委員会では明確に提案を書き込んでもらうようにしようと思えますが、大丈夫でしょうか。</p>
山岡企画監	<p>今の案ができたのは、四万十町の方の意向が、「後期実施計画」期間中の取組を踏まえたうえで、定員充足状況とか継続的な教育効果が得られないと判断された場合は、1校への統合もやむを得ないというようなことでし</p>

	<p>たので。</p> <p>まずは四万十町の方は、「後期実施計画」期間中の取組を見てもらいたいということでしたので、原則としては、この「後期実施計画」期間中は存続ですよというようなことが、基本的にはベースにあります。</p> <p>ただし、状況によって、あまりにも定員充足状況とかが改善されてない状況が著しいということであれば、やはり再考する必要があるのかなということ、今の案になっているところです。</p> <p>今お話がありましたので、数字的なところを書くということも含めて、また11日の教育委員会には一定の案をお示ししたいと考えております。</p> <p>なお、案については、「後期実施計画」が終わってからのことについて、継続的に教育委員会の中で検討をしていったらいいということでしょうか</p>
伊藤教育長	<p>同じ説明はよいので、結論を明確に説明するように。</p> <p>なお、「後期実施計画」が終わってからのというのは四万十町の意見であり、この協議会としての先ほどからの議論は、そうではなかった。</p> <p>だから、毎年検証するというか、それぞれやはり2校の動きについて毎年ウォッチをしながら、「後期実施計画」が終了してもいけるという判断だったらいけれど、そうでなければ早めに教育環境を改善するような検討を進めていく、ということも必要だということである。大きく言えば、そういう体制をとればいいという気もする。</p> <p>そうであるとする、目標になる規模なんかを決めていくということかなと。5年間の結果を見てということ、それはそれでいいんだろうけども、その間教育委員会として議論を止めるということではなくて、状況を見ながら後期終了後の対応を継続してというか、検討していくという体制をしっかりととればいいということである。</p>
山岡企画監	<p>もちろんここに何年度までというような条件を書いていませんので、そこは私も最初にお話ししましたが、普段にそういった教育効果が上がっているのかどうかは、日々見ながら、随時検証をしていく必要があるのかなとは思っているところです。</p>
伊藤教育長	<p>それでは、そこら辺も含めて、きちんと目標が見えてどういう期限があって、それらに対してどういうふうな対応をしていくのかということをもとめて、教育委員会までに間に合うように取りまとめてください。</p>
山岡企画監	<p>次回の教育委員会までに、整理をしていきたいと思っています。</p>
八田委員	<p>その条件の記述で、「窪川高等学校と四万十高等学校を統合し校地を一本化するなど」とあり、などにはなっているんですけど、ここで校地を一本化するっていう将来図も少し見えてしまっているのが少し気になっていて、本当にしたいことは、やはりその地域に何とか学校を残すことだと思うので、あまり慌てて校地を一本化という言葉を出さない方がいいような気がします。</p> <p>それで、私が今回気になったことは、吾北分校の話の所で考え方の中に、分校は小規模ということが前提になっていることから、というのがすごく</p>

	<p>気になって。これはこれからの一つの方策というか、これはあくまでも「後期実施計画」期間中に限ってとは書いてあるけども、分校は小規模でも仕方がないというような考え方が入ってくれば、例えばここも分校にすれば、小規模でも維持できるというような夢が持てるかなという気が少しします。</p>
山岡企画監	<p>吾北分校の所の、分校は小規模が前提というところは、この2月の協議会の議論の中で出たということで、本校については基本的に2学級規模、80人定員なんですけども、分校については1学級40人定員というところで、そういったことでも小規模が前提というところになっていくと思います。</p> <p>ここの条件の部分につきましては、またそこは整理して、11日の教育委員会には一定の案を示させていただきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>とすみません。先ほど私はそういう形で事務局に話しましたけども、そういう条件のまとめ方でいいですか。分校の話については、多分、私の来る前ですけど、新たな分校というのは基本的にやらないという前提があって、案が出て結果ここへ来ていると思いますが。だから、今まで四万十高校について、分校という案は全然出てなかったはずですよ。</p>
山岡企画監	<p>はい、そうです。</p>
伊藤教育長	<p>だから、小さくなって規模が縮小すれば、分校にしていこうという選択肢はなかったの、これまでに分校ということも出てなかったと思うので。分校じゃない選択肢の中でどういうふうにやっていくかという議論で、ここまで来たというふうに聞いています。</p> <p>これまでの窪川高校と四万十高校の協議の経過があったことをきちんと踏まえて、どういうふうな条件書きにするのかということだと思っんで、先ほどの事務局の答弁の「分校を含めて条件を検討する」はおかしいではないか。</p>
山岡企画監	<p>すいません。それでは、20人とかいうのがあった方がいいのでしょうか。</p>
伊藤教育長	<p>今、木村委員からは応援するよなという話があって、もちろん応援は当然していくんですけども、やはり数値目標として、一つの目安というものがないと、どこでいいのかというような話が出てくると思います。</p> <p>もともと40人、20人とか、2学級かというようなところがありながら、特例的にいうところ20人に落としてきているということならば、少なくとも20人という数字が最低の数字になってくるのかなと。</p> <p>それで20人にするのか、それから上に上げるのかということだと思いますので、そこら辺も全体のバランスをとって、提案をできるようにしておいてください。あくまでも「分校にする」という選択肢ではないということの確認です。</p>

永野委員	<p>どちらが親切かということだと思いますね。四万十町としても、最大限の努力をして住民にも説明して、ここまでやったけれどもこうだっていう、ある意味ハードルがないと、こちらが曖昧にしたままでは町としても困るのではないかなと考えます。</p> <p>前回の論議に私は出ていませんので、どういう雰囲気か全く分かりませんが、この1年間のことを踏まえれば、かなり四万十町が強い意思を持ってここでご説明なさったのではないかなと。</p> <p>ここまでやってみてこうだったら、きちんと住民に説明するっていうふうなことを、おっしゃったかどうか分かりませんが、それぐらいの強い思いで意見表明なされたんじゃないかなと想像するんです。</p> <p>私たちが、オブラートに包むのが本当に親切なのか、きちっとこういう所で、こういうふうにした方が、住民に対する説明責任を果たせるのかと。</p> <p>要は、説明責任が果たせないと、四万十町も困るんじゃないかなというふうに思うんですね。どちらが親切なのかということ、結局、私たちが考えなくてはならないと思います。</p>
伊藤教育長	<p>多分ここは、オブラートで包む気持ちはなくて、頭の中にこの数字はあって、当然のように事務局はあって、でも書いてないんじゃないかと思います。</p> <p>どちらにしても、20人に向けて確保するのか、40人確保するのかということで、その手段であったり、対応する中身、やるべき内容が全然違ってくると思います。ですから、やはりそこは示してあげないと、取るべき手段とか量とかが違ってきますので、一定そこは明確にしないと取り組みようがないと思います。</p> <p>最終的には今、永野委員が言われたように、説明責任がというようなところになってきますので、この議論の中では、数字は示さないと不親切だというか、取組ができなくなるという感じはします。</p> <p>その辺り、今までの議論の経過も踏まえて、整理をしっかりとしてください。</p> <p>それでは、高吾地域がなければ、幡多地域に移らせていただこうと思いますけども。</p>
各委員 伊藤教育長	<p><意見なし></p> <p>そしたら、幡多地域をお願いします。</p>

(6) 幡多地域

山岡企画監	<p>34ページをお願いいたします。大方高校でございます。</p> <p>全日制につきましては、基礎学力の充実・定着化、放課後加力補習の充実というところです。</p> <p>コミュニティスクールとして、学校運営協議会というのが設置されていますので、地域連携コーディネーターの活用によって、地域や地域人材との連携を深めていく。</p>
-------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

そして、南海トラフ地震で 34m の津波というようなこともありますので、防災教育の充実というところ。京都大学大学院生とのコラボなどによって防災教育を展開し、防災リーダーを育成。防災教育を踏まえた地域貢献をしていくというところ です。

それから、35 ページにありますけれども、大方高校と宿毛高校は幡多地域における商業を学べる場でありますので、商業に関するコンテストにチャレンジする。あるいは、高崎商科大学との連携も深めていく。資格取得にも努めているというところ です。

部活動の面では、女子サッカー一部の創設によって黒潮町と協働する。広いグラウンドもありますので、将来的にはワールドカップ・オリンピック選手を育成するような高い目標なども掲げているところ です。

定時制につきましては、働きながら学ぶということもありますので、少人数の特長を生かし、個別指導を全教科で実施して、生徒一人ひとりの弱点を先生全員で共有するといったようなこと。若者サポートステーションとの連携なども深めていくというところ でございます。

通信制につきましては、学習支援員を配置して、英数国の基本 3 教科のスクーリングにおいて、ティームティーチング (TT) など実施していきたいと考えております。

続きまして、36 ページの幡多農業高校でございます。

幡多農業高校も幡多地域の農業教育の拠点校でありますので、地域農業教育支援センターの設置などによります農業関係者の育成。それから、小中学校の体験学習を受け入れる。高校による出前授業などもやっていくというところ です。

地域との連携というところでは、インターシップやボランティア活動を組み合わせた活動をしていく。はたのう市場などで地域との交流を図っていく。農業の教育力を生かしたプロジェクト学習なども推進していくというところ です。

高知農業高校の所にもありましたけれども、GAP 認証取得と地域への発信、食品製造に関する HACCP 教育の実施。それから関連機関として、農業大学校・林業大学校・農業振興センター、そして畜産試験場との連携なども図っていくというところ です。

続きまして、37 ページの中村高校・中学校でございます。

幡多地域の進学拠点校として、併設型中高一貫教育のメリットを生かしていく。「語れる」人材を育成するということを学校として目指しておりますので、グループワークや討論・発表等を取り入れた授業を行っているというところ です。

地域との連携や部活動の活性化というところでは、インターシップやボランティア活動、そして、「総合的な学習の時間」や学校内外での様々な取組を通して、将来地域において「動ける」人材を育成していくというところ です。

また、中村高校につきましては、進学拠点校ですので、地域からのかなり要望もありますので、新しい大学入試のシステムにも対応できる研究や実践を推進していく。そして、併設中学校でも、大学に直接触れる機会を設けるといった取組をしていくというところ です。

続きまして、中村高校西土佐分校でございます。

西土佐分校につきましては、地域との連携というところで、分校農園「大地の恵み」による地域との連携を図っていく。

そして、オンデマンド教材による基礎学力の定着、ICTを活用した県内大学や近隣校との交流も行う。

部活動におきましては、カヌー一部の取組を応援していく。そして、ボランティアグループ「ラポール」の地域との密着した取組も進めていくというところでは。

それから、枠囲みの中山間地域にある学校に共通する項目としましては、寮などの有効活用なども行っていきたいということです。

そして、カヌーを通して意欲ある生徒を全国から募集する。地元からもう少し学校説明会を広げて、幡多地域全体に声をかけていくような取組をしていくというところでは。

続きまして、38 ページの宿毛工業高校でございます。

宿毛工業高校は、幡多地域の工業教育の拠点校ですので、技能検定（旋盤、フライス）とか電気工事士などの資格試験にも力を入れているというところでは。ものづくりコンテストとか、全国ロボット大会の出場を目指すといったところ。

そして、西南中核工業団地とかの連携も深め、産学官の連携によるものづくりの共同研究。

企業との連携したインターンシップ、企業見学会などを実施して参加人数を増やしていく。そして、生徒の確保に努めていきたいというところではございます。

また、宿毛工業高校につきましては、丸（○）の四つ目のポツの三つ目にありますけれども、今後の入学志願者数の動向も踏まえながら、各学科（専攻）の入学者が入学定員の過半数に満たさないような状況があった場合については、学科改編も検討していくというところではございます。

併せまして、運動部活動もさらに充実させていくというところでは。

続きまして、宿毛高校でございます。

地域との係わりがあるコマツ製作所や早稲田大学・高等学校との交流を深めていくというところでは。

総合学科ですので、他の学校でもありましたけれども、中学生の保護者に対して学校説明会を開催して総合学科の良さを伝えていく。

それから、スポーツの盛んな地域の期待に応えられるように、休部状態であったレスリング部を復活させるとか、あるいは地域に今でも盛んな相撲、男子バレーボール、サッカーなどについて、小中学校との連携を深めていく。

津波被害の部分につきましては、宿毛市の中心部が広範囲にわたって浸水するということは想定されておりますので、高知海洋高校の所にもありましたけれども、複数の防災の専門家による現地調査を行い、必要な対策をとっていく。そして、避難マニュアルを作成していく。

定時制につきましては、学び直しの機会を増やすためにも、前期・後期の2回の入学機会の提供をできるかどうか、そういった可能性も検討していくというところではございます。

続きまして、40 ページの清水高校でございます。清水中学校との連携型中高一貫教育による連携授業を推進しております。

	<p>アメリカのフェアハイブン姉妹校との留学制度を活用する。そして、短期海外留学制度を実施、英語検定の取得拡大に取り組んでいるというところで、語学に力を入れていくというところでは、</p> <p>そして、枠囲みの中山間地域にある学校に共通する項目の丸（○）の二つ目ですけれども、地元中学校からの進学率を更に向上させるというところでは、小中高一貫地域学習プログラムを開発していく。そして、高台移転をその契機として、中学校との連携を更に深めていく。</p> <p>また、その下にもありますけれども、南海トラフ地震による津波被害から確実に生徒を守るために速やかに高台移転というところでは、用地取得が必要になってきますので、平成 35 年度をめどに移転するというところ。</p> <p>定時制につきましては、異年齢交流活動や体験学習の実施をしていきたいというところでございます。</p> <p>41 ページの中村高等学校西土佐分校につきましては、吾北分校と同じように基本的に継続していく。「後期実施計画」期間中につきましては、その取組の成果を検証しながら、この西土佐分校については、基本的に継続するというような考え方を示させていただきたいと思っています。</p> <p>そして、清水高校の高台移転につきましては、清水高校の全日制・定時制を含めて高台へ移転することとして、新たな校舎を設置する。</p> <p>用地取得や必要な施設整備がありますので、何年度ということは今明示することはできませんけど、平成 35 年度をめどに移転を進めていきたいと考えております。</p> <p>施設整備の部分につきましては、なお書きの所に書いていますけれども、施設については、清水中学校と清水高等学校の教室や職員室などは別棟としますが、体育館やグラウンド等につきましては、できるだけ共用するという形で施設整備を進めていきたいと考えております。</p> <p>説明は以上でございます。</p> <p>伊藤教育長 そうしましたら、幡多地域の説明がございましたので、これについてご意見をお願いいたします。</p> <p>中橋委員 宿毛高校についてなんですけれども、後ろの方に付いている高知の地図ですか、枠囲みをしたりして高校の場所を示している地図を見ると、南海トラフ地震への対応を検討する学校として点線で囲まれていて、この中で統合とか移転とか、そういった対策が取られていないのが、高知海洋高校と宿毛高校が残っているのかなと。</p> <p>先ほどの話では、高知海洋高校というのは学校の特色上、海に近い所じゃないと、という条件があるのは分かるんですけれども、宿毛高校については海に近い所じゃないといけない、ということはないのではないかなと思うんですけれども。</p> <p>そこで 39 ページを見ると、南海トラフ地震への対策として、適地への移転の可能性も含め、ということで書かれていますが、高知海洋高校と同じテンションで書いていて、適地への移転ということについては、特に触れられていないところがちょっと気になるんですけれども。</p> <p>宿毛高校は、高知海洋高校以上に適地への移転の可能性というのは、喫緊の課題として検討をしなければいけないんじゃないでしょうか。</p>
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

山岡企画監	<p>宿毛市の中心部が広範囲にわたって浸水するということがありますので、前期でも書いておりましたように、なお、南海トラフ地震による津波への対応のため、適地への移転の可能性も含め、将来の学校の在り方を検討していくということで、前期と同じような表現をさせていただいているところでございます。</p> <p>現実に関の今このところ宿毛市において、移転先地というのはまだ見つからない状況ですので、こういった表現に、現状のところはなっているところでございます。</p>
中橋委員	<p>徐々に南海トラフ地震に対する対策として、ほかの高校は現実化しているなかで、宿毛高校だけが取り残されているような印象を受けるので、もう少しスピード感を持って、適地への移転の可能性というのを検討しないといけないと思うし、移転に関する具体策というのも考えていかなければいけないと思うんですけれども、そこはまだ書き込めない状況ということなんでしょうか。</p>
山岡企画監	<p>現時点では、まだ具体的な適地というのが見つからないので、こういった表現にとどまっているというところなんです。しかし、踏み込んで書くということであれば、それはまた、検討していきたいと思っております。</p>
平田委員	<p>ちょっと間違っておったらあれなんですけれど、西部地区の運動部活動強化拠点校というのは中村高校ではなかったですかね。違いましたかね。</p>
山岡企画監	<p>はい、中村高校です。</p>
平田委員	<p>ここの学校の在り方について、東部、中央地区2校、西部については中村高校では全く触れられてないというところが、少しバランスが取れてないと思います。いくら学校が云々を言っても、ちょっとおかしいなという感じを受けております。</p> <p>それと、そういう視点で見た時に、各校が国の指定を受けたり、県指定というのがあるかどうか分かりませんが、そういうところを弾みとして振興計画を考えるという表記の仕方も大事ではないかなと思っております。</p> <p>中村高校がそうであれば、ぜひ加えて全体のバランスは取っていただきたいと思っております。</p>
山岡企画監	<p>そこは、運動部活動の強化拠点校という取組を中村高校でも記載していきたいと考えています。</p>
伊藤教育長	<p>先ほどの中橋委員の、津波の関係ですが、前期ではどういう状況になっているんですか。移転についての検討はしたと思うんですが、それはないんですか。</p>
竹崎課長	<p>具体的に移転ということで検討したということではございませんが、ただ、移転できそうな、そういうのがあるかどうかということ視察に行ったよ</p>

	うなことは、前回の計画策定時にはございますけども、具体を協議したということはございません。
伊藤教育長	現状、宿毛高校として移れる場所が、候補地とかも含めてあるわけですか。
竹崎課長	何カ所か視察には行きましたけども、実際にはなかなか難しいという状況でございます。
伊藤教育長	それでは、宿毛高校として存続させるとしては、なかなか今、土地的には難しいということですか。変な話だけれど、ほかの地名になってしまうみたいなことになるわけですか。それとも、いわゆる宿毛高校として、宿毛の中に置いておくというところで適地がないとか、そんな状況ですか。
竹崎課長	前回見に行った時には、近隣しか見ていませんので、近隣で移れるような場所は、その時は見つけることができなかったというようなところでございます。
伊藤教育長	近隣だけということだったら、宿毛全体が浸水区域内にあるということなので、近隣では多分浸水しない区域というのはないだろうけども、そこは、検討は継続してやっていかないといけないという。もう少しそこら辺の書き込みを検討しておいてください。
八田委員	宿毛高校の定時制のところ、前期・後期、2回の入学機会の提供という制度づくりの可能性というのは、これは学び直しの機会をつくるので、すごくいいことだと思いますが、現実にと考えると、どうカリキュラムを組むのがすごく難しそうな気もするので、現実的にこういうことは可能なんですか。
山岡企画監	そういう前期・後期制というようなこともありますので、そういったこともできるかどうかも含めて可能性を検討していきたいということで、全くできないということではないと思っております。
八田委員	例えばほかの県とかでは、そういう事例はあるんですか。
山岡企画監	ほかの県では、そういった事例もあるようでございます。
八田委員	もしやるのであれば、ぜひ宿毛高校だけではなくて、ほかの定時制でも一斉にここではやっていただけたらいいかなという気がします。
山岡企画監	そういったことも踏まえて、また検討させていただきたいと思っております。
伊藤教育長	ほか、よろしいですか。幡多地域に限らず全体から、東部も含めて結構ですので、ご意見がありましたらお願いします。

<p>永野委員</p>	<p>この振興計画、通して見させていただいたんですけれども、中山間地域にある学校のいわゆる共通項目というのが、ICTを中心にしてありますけれども、今、八田委員からもありましたように、校種によって共通項というのがあるんですね。</p> <p>そこをどういうふうに教育委員会として明示してあげられるか、教育委員会の意思がきちんと示せるかということも、非常に大事なことではないかな。</p> <p>多分に各校の頑張りでできているというのは分かりますけれども、全体としての串刺しというのはやはり、対応していただく時間がもうないかもしれないかもしれませんけども、あればいいのかなと思います。</p> <p>例えば、産業系の学校であれば、「高知県産業振興計画を生かす」というふうにするなどです。</p> <p>ですから、それぞれの学校の特色に添えるような串刺しをしてあげられるような、応援の仕方もあるのではないかなというふうに受け取れました。</p>
<p>伊藤教育長</p>	<p>先ほどお話ししましたが、具体的な活用方法というのはここでお示ししていますので。例えば、冒頭の全体の所で具体的な活用方法を記入させていただくとかいうようなこともあると思います。またそこら辺を少し、事務局の方で工夫をしてもらったらと思います。</p>
<p>八田委員</p>	<p>全体の見せ方というのか、最終的にせめてその地域の皆さんが、この高校はどうなるのかなというふうに、興味を持って見ていただけるようにしたいんですけど。この形でこれをポンと出されても、見てもらえないかなという気がします。</p> <p>要するに、例えばこの高校はこんなふうに変わりますとか、高校別に出すとか、何かそういう工夫はできないでしょうか。この高校は、今これくらい定員が割れて課題を抱えていますので、本当はこれくらい大変で、そのためにどうしますかみたいな。せめてそういう問題提起だけでもできればいいなという気がするんですけども。これをPDFで公開しても多分、見てもらえないだらなというところが少し気になります。</p> <p>それと、そもそも振興計画なんですよ。県として、この高校をこれまでこうしてきたけど、こんなふうに変えるよとか、こんなカッコいい学校に変えていくよみたいなことが、何かなかなか見えなくて。</p> <p>要は、結局ほとんどの内容は、うちの高校はこれからこんなに頑張りますっていう。もちろん頑張ったら当たり前なんですよ、県民から見たら、高校なんだから頑張らなさいよ、やるべきことをやりなさいよって。</p> <p>いや、そうじゃなくて、今まではこうじゃなかったけれども、これからはこんな高校になりますっていう、何かそういう見せ方をしないと、興味も持ってもらえない気がします。</p> <p>本質的ですがごく難しいことなんですけど、これを、せめてその高校に関わる人、地域の人、あるいは卒業生、これから進学する人が目にして、この高校はこんなふうに県が支援して変えていくんだっていう、プランになかなか見えないなと。今さら、中身を変える余裕はないんだろうけども、そう見せる方法を検討ください。</p>

	<p>要するにこの学校はこんなふうになるよっていう、ポイントが分かるような見せ方を何か工夫できればいいなと。ちょっと無理な注文かもしれませんが。</p>
山岡企画監	<p>いろんな機会を通じて、パブリックコメントが行われますということを知り、なるべくパブコメで皆さんの意見をいただくようなことになっていきたいと思います。</p>
伊藤教育長	<p>振興策活性化ですので、うちの魅力はこうなんだと、これだからたくさんのお客さんに来てもらいたいというようなスタンスで、学校にもお願いはしていただいていたんですけど、なかなかそれが、ちょっとそういう格好でなくて、こんなことをしますみたいなレベルの部分がありますけど、そこはまたブラッシュアップをして、これから対応していかないとはいけません。パブコメの見せ方の部分でいうと、先ほど八田委員が言われたように、多分これだけのボリュームのものを PDF であげても難しいので、少なくとも概要みたいなものは用意しないとはいけません。これ見ただけでは、なかなか奥まではという形ですので、少なくとも、概要は用意してもらいたいと思います。</p>
永野委員	<p>くどいですが、例えば農業高校なんていうのは、たくさんありますよね。対面販売をするまで書いてあるんです。</p> <p>どういう子どもを育てたいみたいな帯があって、見せ方の問題でしょうけど、その帯に特色としてこういうものがぶら下がっているということが、全ての学校で同じような分量でパンと出せば、もっと見やすくなるんじゃないかなと思っています。</p>
伊藤教育長	<p>例えば、こんなことがあるよというところまでは、おそらく各校のホームページとか、そういったものへ見に行ってもらおうというなかで、振興策の中で、やはりこういう新しい魅力というか、こういうことで来てもらえるんだということを中心に書いてもらうような形になるんだろうと。</p> <p>だから、あまり細かいところを書き込むと分かりづらくもなるし、冒頭にお話があった、どこまで細かいことを書くんですかという施策の粒度というか、やはり中分類ぐらいまでで、大きな方向性でこういった形ということにしないと、細かいところまでやると、学校の紹介の冊子になってしまいますので、そこまでは、各校のそれぞれのホームページであったり、学校の PR 冊子でやっていただくというようなまとめ方にしないと、なかなか大変なのかなと思っています。</p>
永野委員	<p>全体にそうだと思います。だから、安芸高校・安芸中学校は残しますっていうことですよ、これだったら。そういうのがバーンと出ないと、何を訴えているのか分からない。</p>
伊藤教育長	<p>そうですね。ですから、先ほどありました、拠点校として安芸高校としては、陸上をはじめ、そういったものに力を入れて取り組んでいきますとか、そういう大きな柱が中心にあって、どういうスケジュールで、どうい</p>

	<p>う人がどういったものを使って実現していくんですかという、細かい計画に本当は下りていく話なので、そこまでは書き切れませんね。</p> <p>ですから、やはりもうちょっと大きな項目で整理をしていかないと、なかなかボリュームが多くなってくるし、書いているところがバラバラ感も出てくるしというところで、そこら辺はぜひ、急いで修正をしていただきたいと思います。</p>
山岡企画監	はい。
平田委員	<p>今、教育長さんをはじめ、皆さんのお話ししたことと関連はしておりますけれども、私はもっと大胆な考え方を持っているんですけど。</p> <p>ここに書かれている内容は、学校と事務局で十分詰めた内容であるというふうに思っております。特にそれぞれの内容について異論は持ってないんですけど、高知県教育委員会として発行する「後期再編振興計画」として、各学校を見ました時に、本当にバランスがとれてないですね。</p> <p>八田委員が言いましたように、定時制で、うちの学校は前期・後期を検討しますという時に、どういうふうに学校関係者、または県民が受けるのかなという心配をしております。</p> <p>少なくとも、この学校名と丸印「○」と点「・」と星形の四角「◆」がありますけど、「◆」は、私は全く要らないと思いますね。それと「・」も、私はもう要らないんじゃないかと思います。</p> <p>それぞれの学校が、学校計画の中できちっと対応すべきことであって。高知県教育委員会の振興計画の冊子で出すということでは、そうではないという感じがしています。という、大胆な思いをしております。それが大きい点では一つでございます。</p> <p>もう一つは、皆さんどう思うか分かりませんが、この冊子の中に「高校」という言葉と「高等学校」が、ごじゃごじゃになっています。</p> <p>例えば1ページを見てください。1ページを見てパツと気が付くのが、「後期実施計画」学校名というのが、室戸高校、中芸高校というふうに始めていますよね。まあ、それはそれで良しとして。</p> <p>次に、ICTの活用による中山間地域の高校の教育の充実。私は、ここは高等学校という表記でないといけないと思います。その下の表現も、高等学校という表現を使ってきていますね。そういうちょっと最後の詰めをお願いします。</p> <p>しかし事務局として、この内容では高等学校を表記する、ここでは高校と表記するということがきちっと分かればいいと思います。そこが残念ながら、すごく違和感を、私は感じておりました。</p> <p>例えば本文の中でも、6ページを見てください。6ページを見まして、安芸高校・安芸中学校の下の丸（○）ですね。安芸桜ヶ丘高等学校と書いています。そういうところなんかは、もっと事務局としても一定の根拠を持って、高等学校と高校の表記をしていただきたい。</p> <p>2点申しましたけれども、最後の編集にあたってのご参考にしていただければいいかなと思います。それ以上はもう申しませんので、お願いします。</p>

伊藤教育長	はい。そこは言葉の使い方というか意味も含めて、しっかりと統一性を持ってまとめていただくようお願いをします。
山岡企画監	はい、分かりました。
伊藤教育長	どうしてもというご意見がありましたら、お願いしたいと思います。
各委員	<意見なし>
伊藤教育長	全体的に幾つかご意見をいただいたので、そこをしっかりと反映をさせて、次回までに訂正なり修正をしていただくようお願いをします。

【閉会】

伊藤教育長	それでは、今日の教育委員会協議会はこれで終わらせていただきたいと思いますけど、事務局から何かありますか。
山岡企画監	次回の教育委員会協議会はまだ決まっていません。11日の教育委員会が直近でございます。説明は以上でございます。
伊藤教育長	そうしましたら、今日は長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。またよろしくお願いいたします。